



西区1号墳土器集積検出状況（西から）



同上1段目（西から）



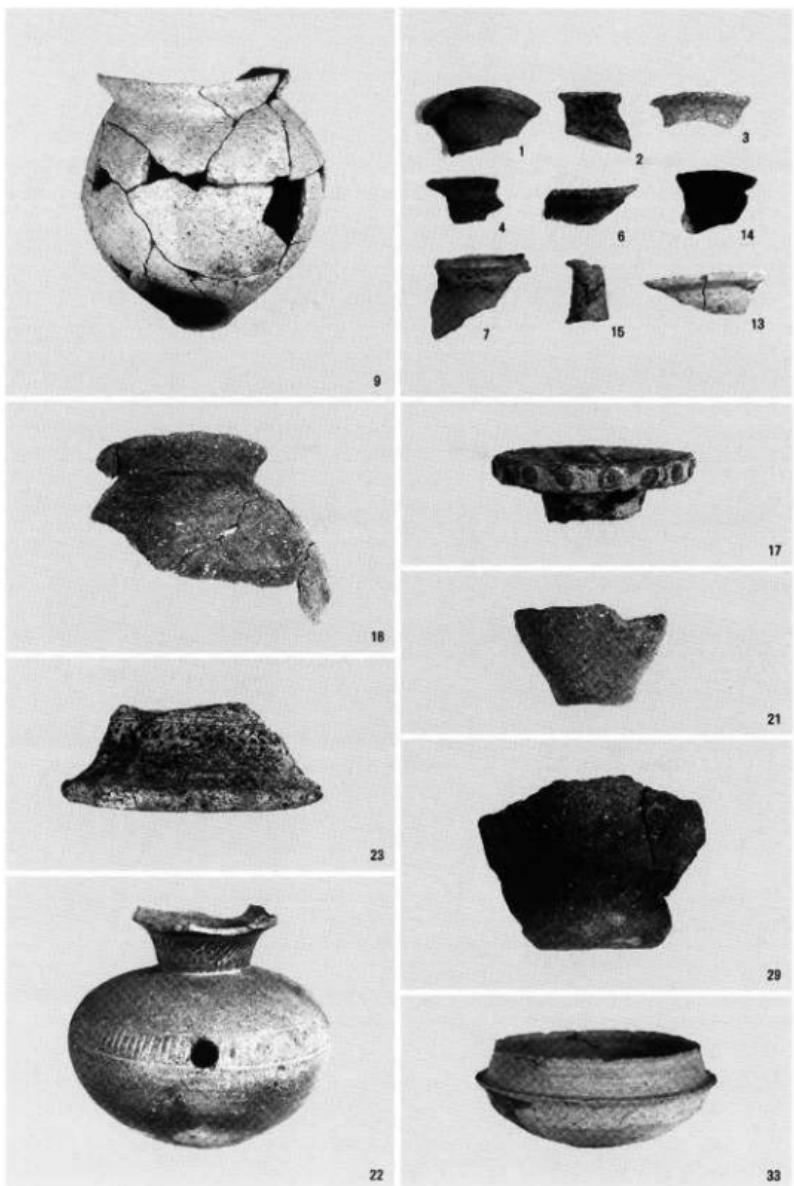
同上1段目下部（西から）



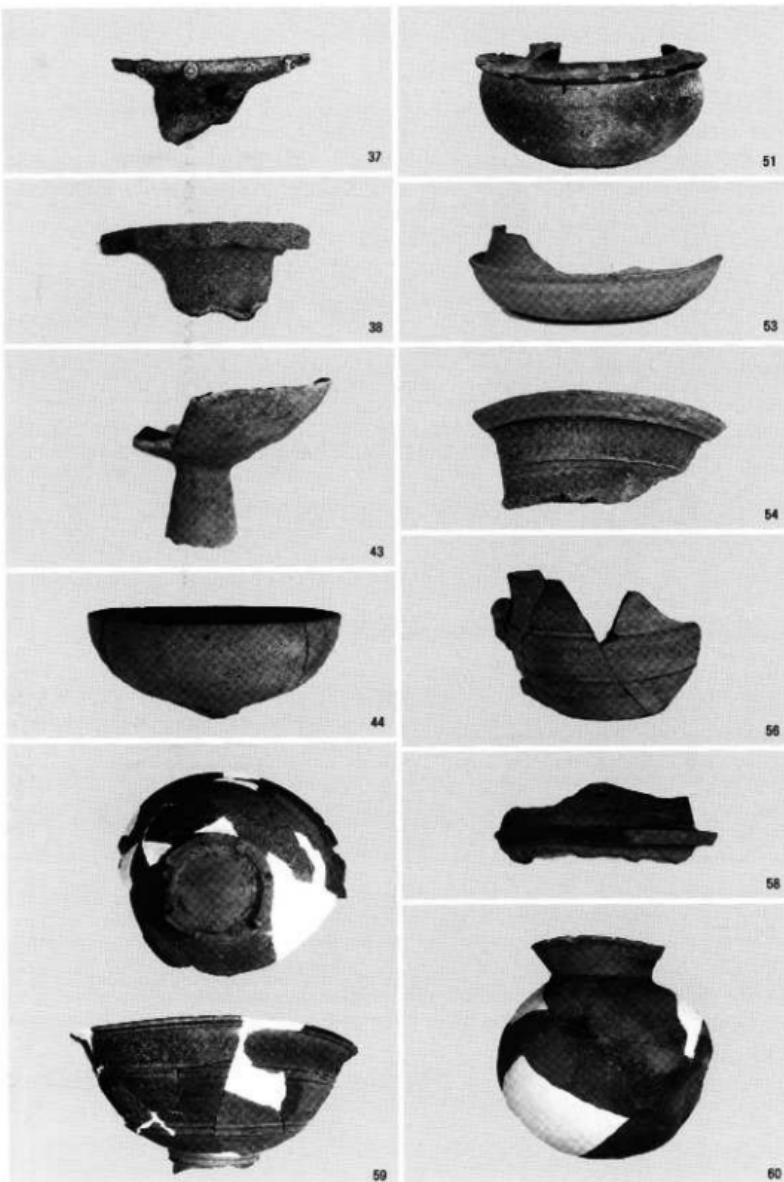
西区3号填検出状況（西から）



同上（南から）



東区SE-1(1~15)、SK-1(17・18・21)・SK-8(22)、SD-3(23)・SD-5(29)・
SD-13(33)出土遺物



東区第4層出土遺物



61



65



63



66



62



67



70



71

西区 S E - 2 (61・62・63・65・66・67)・S E - 4 (70・71) 出土遺物



72



73



75



90



91



79



81



93

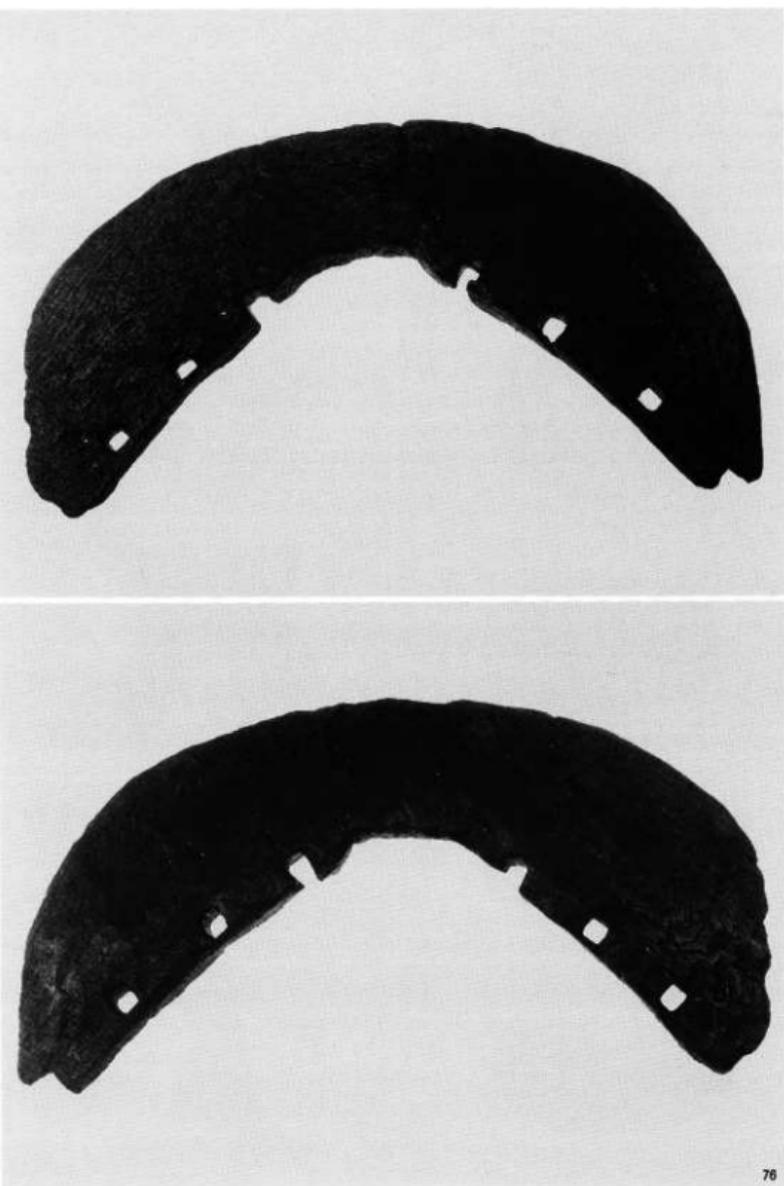


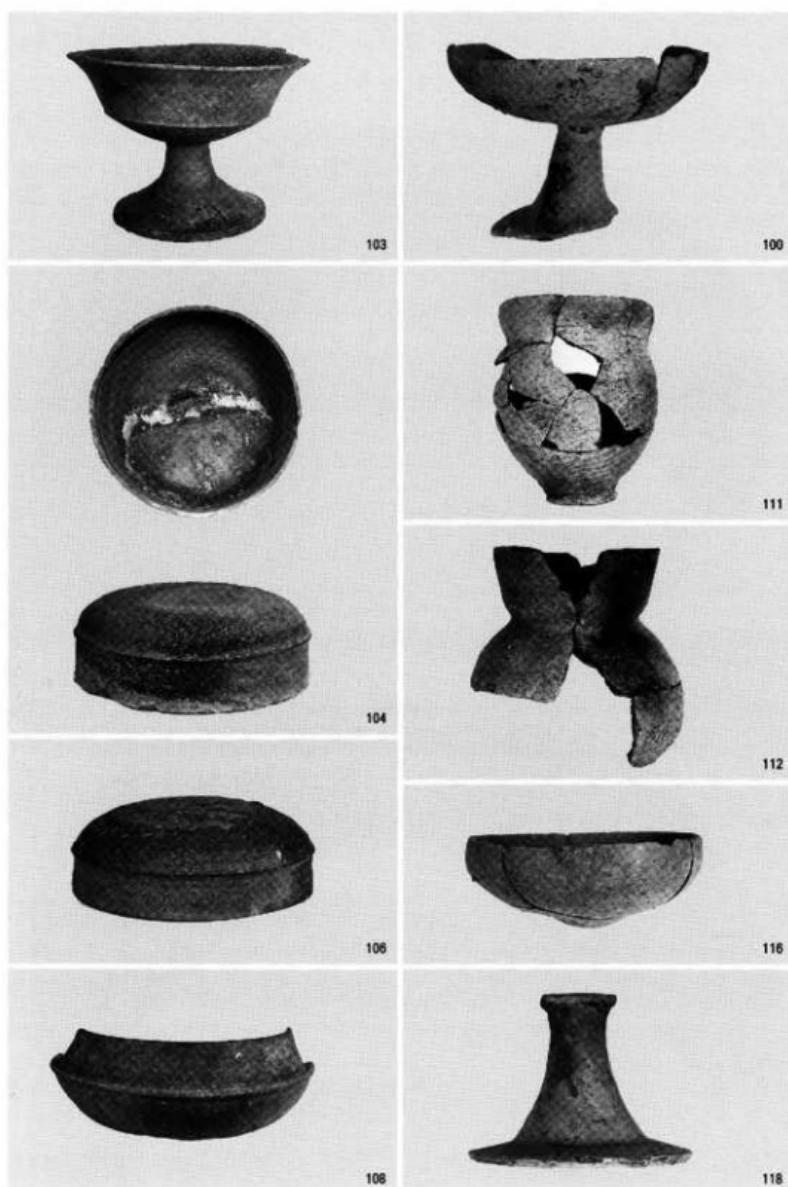
80



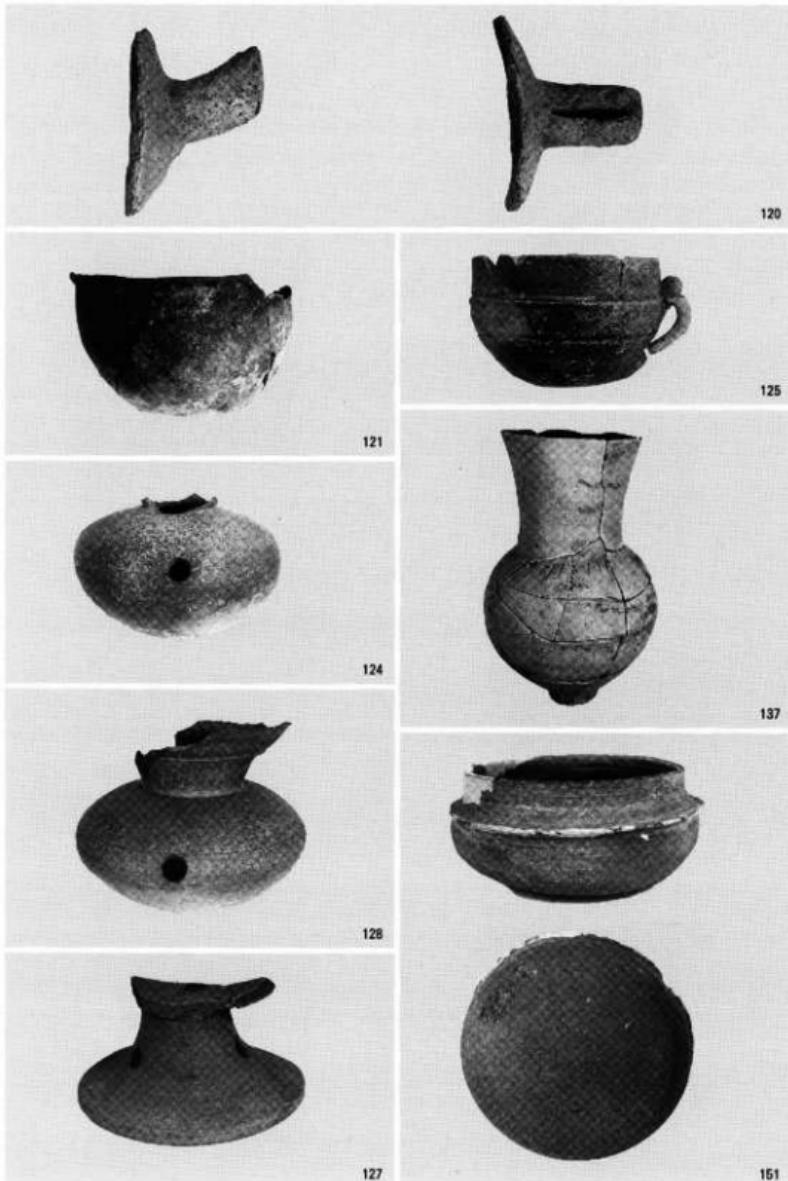
95

西区 S E - 4 (72・73・75)、S K - 12 (78)・S K - 13 (80・81)・S K - 14 (90・91・93・95) 出土遺物

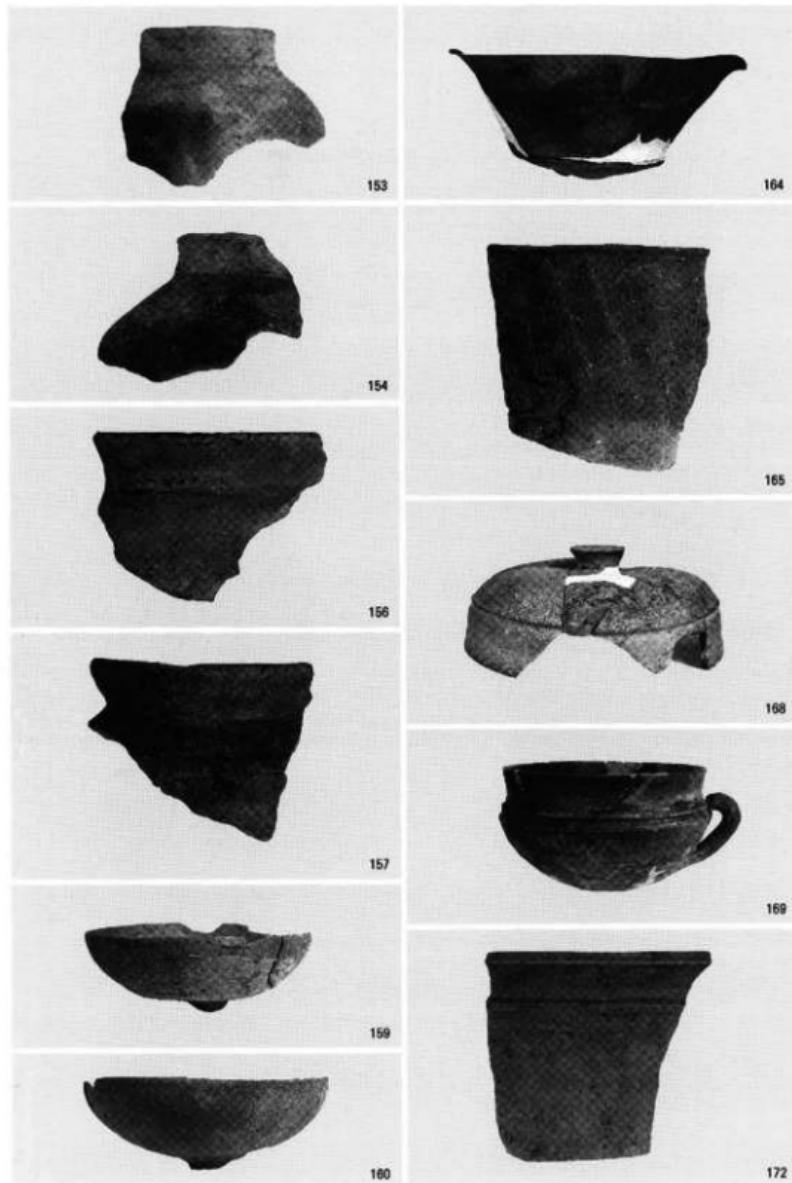




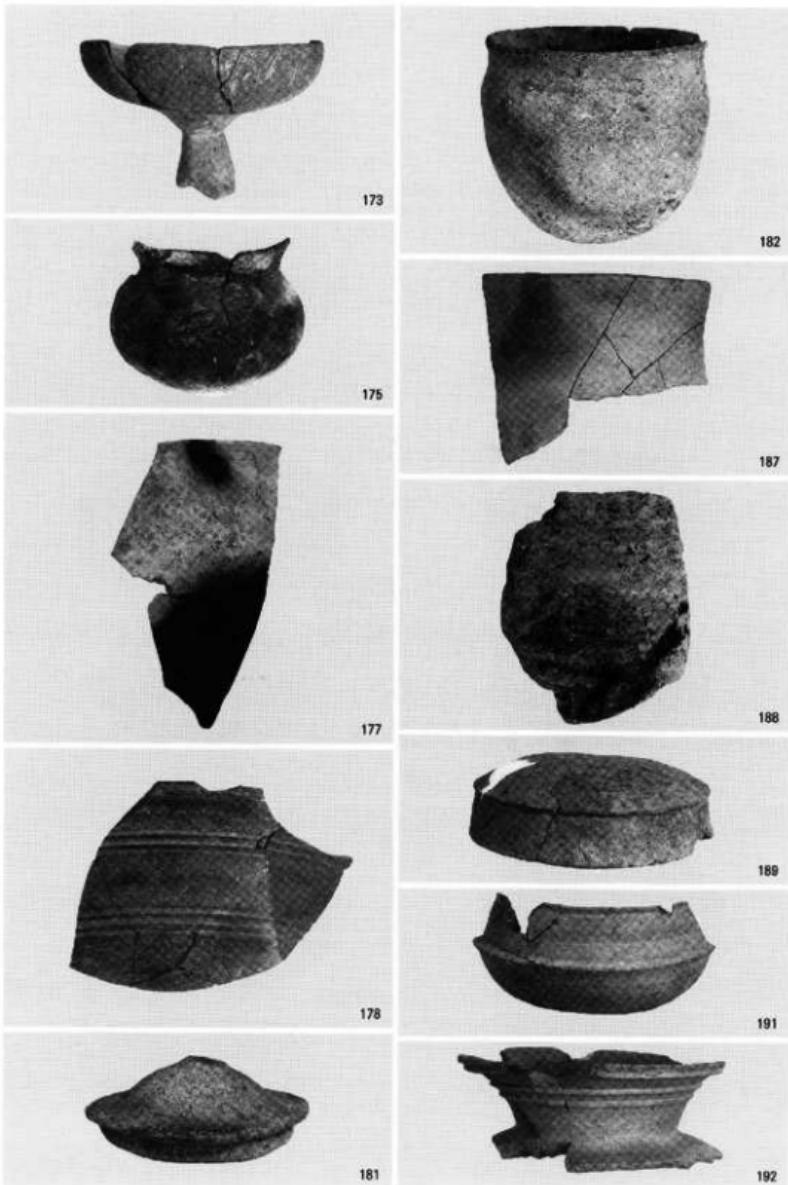
西区SK-15 (100・103・104・106・108)・SK-16 (111)・SK-18 (112・116・118) 出土遺物



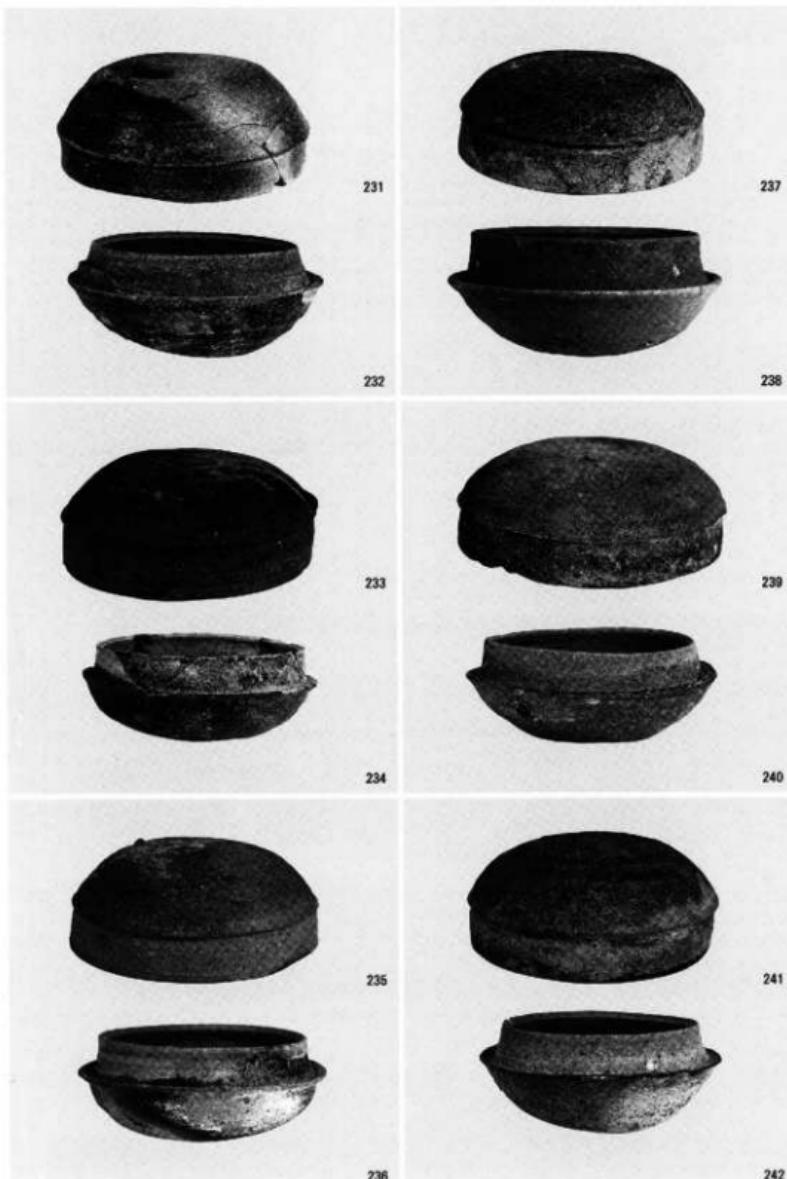
西区 S K - 18 (120・121・124・125)・S K - 19 (127・128)・S K - 35 (137)、S D - 24 (151) 出土遺物



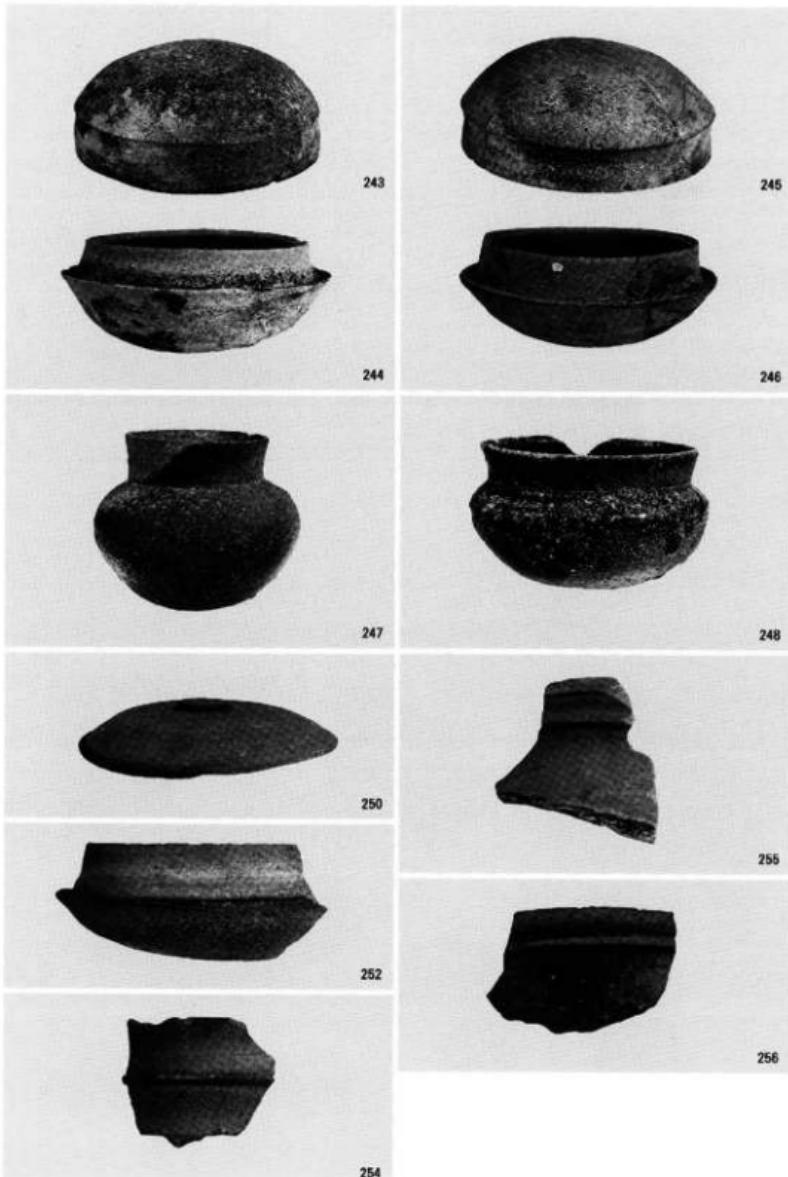
西区 S D-27出土遺物



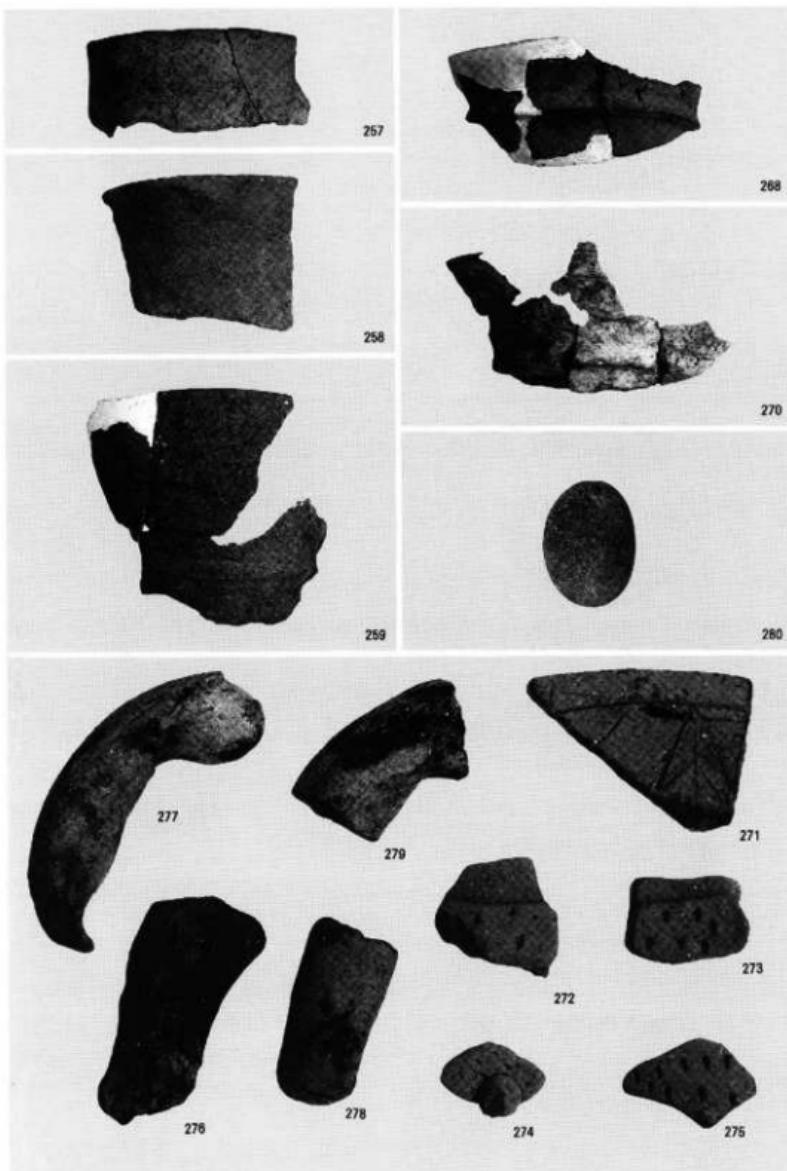
西区 S D - 28 (173・175・177・178)・S D - 31 (181・182・187～189・191・192) 出土遺物



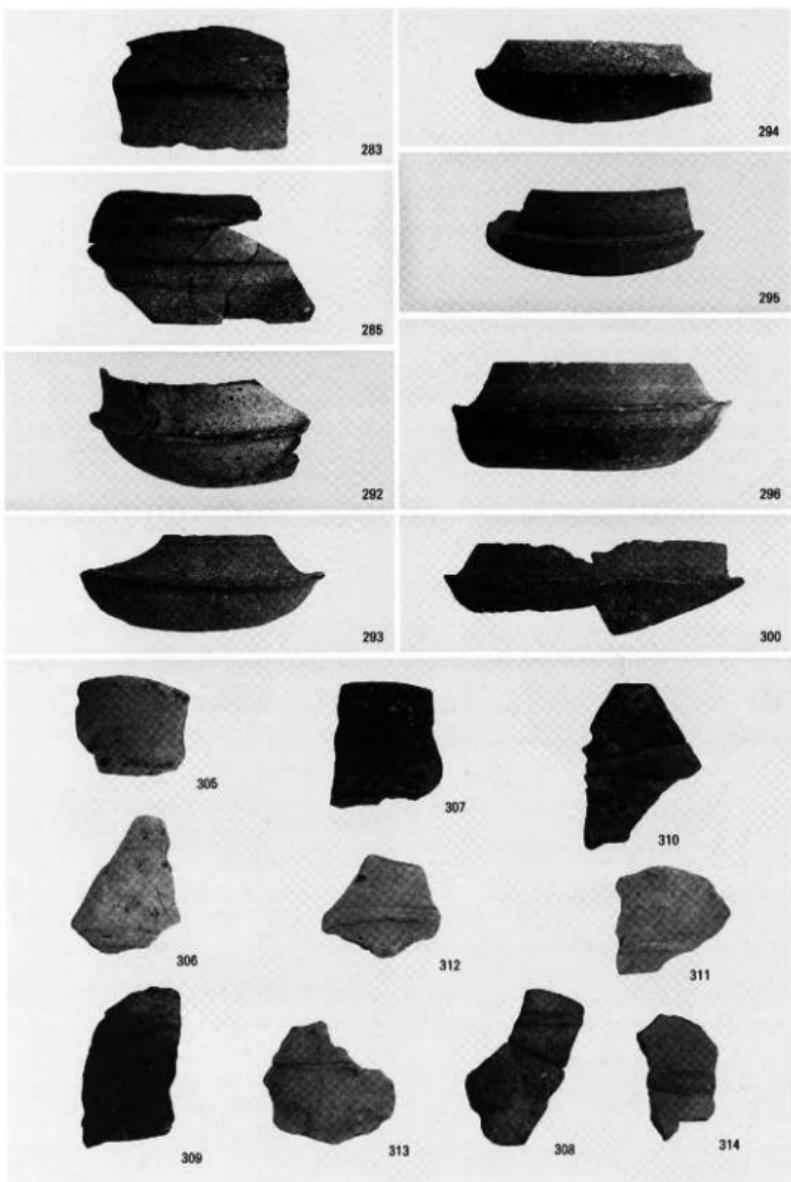
西区 1号填土器集出土遺物



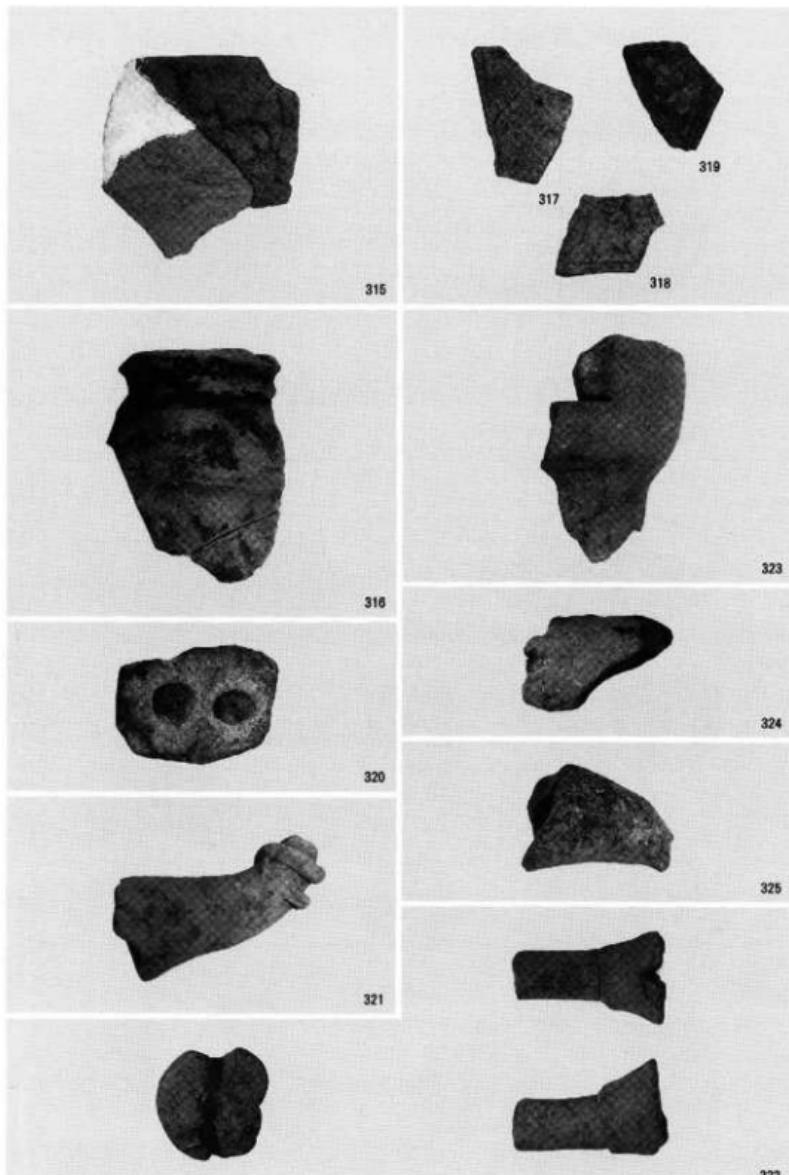
西区 1号填出土遗物 (243~248) · 2号填出土遗物 (250~256)



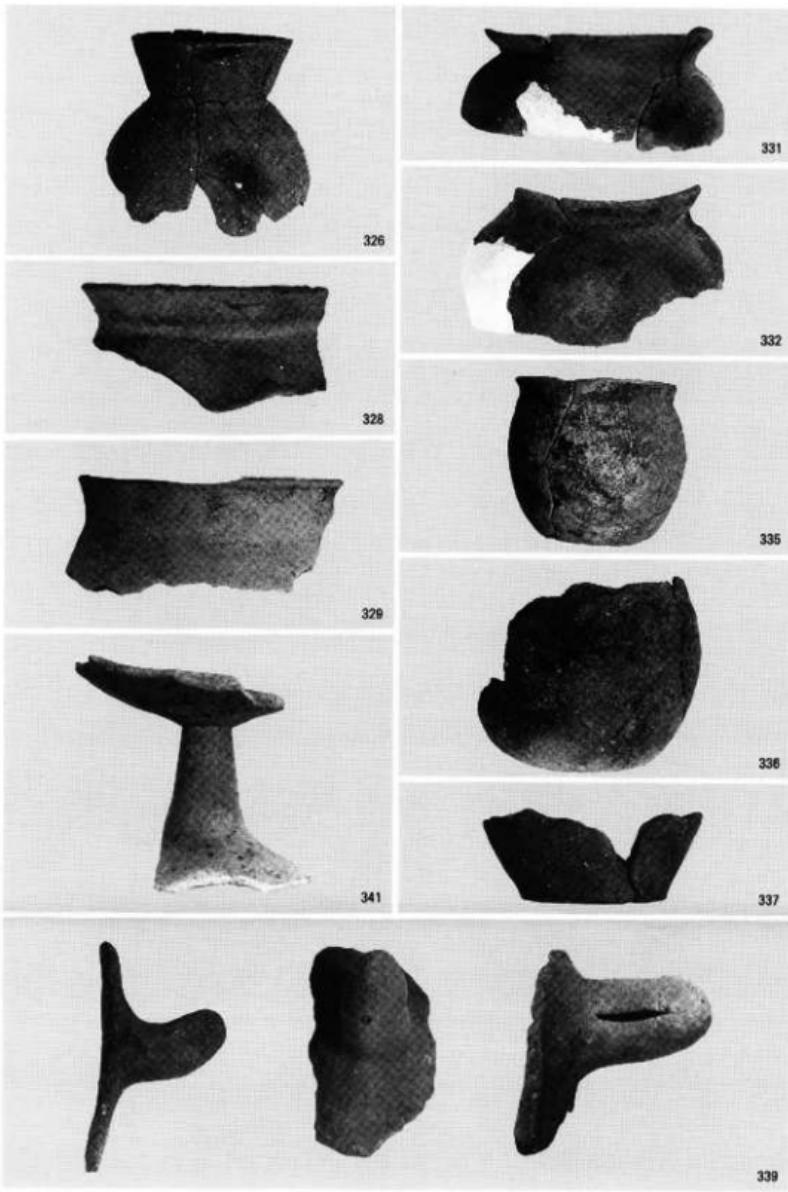
西区 2号填出土遗物



西区3号出土遗物

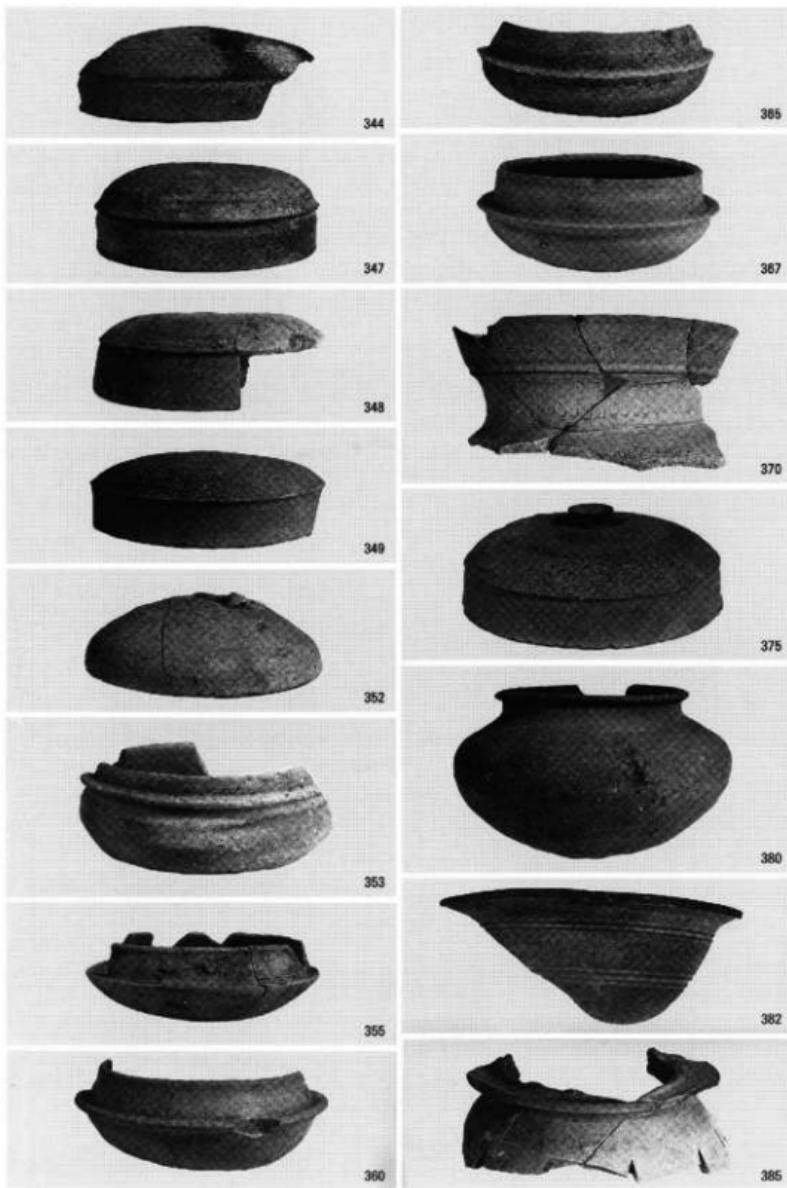


西区 3号墳出土遺物

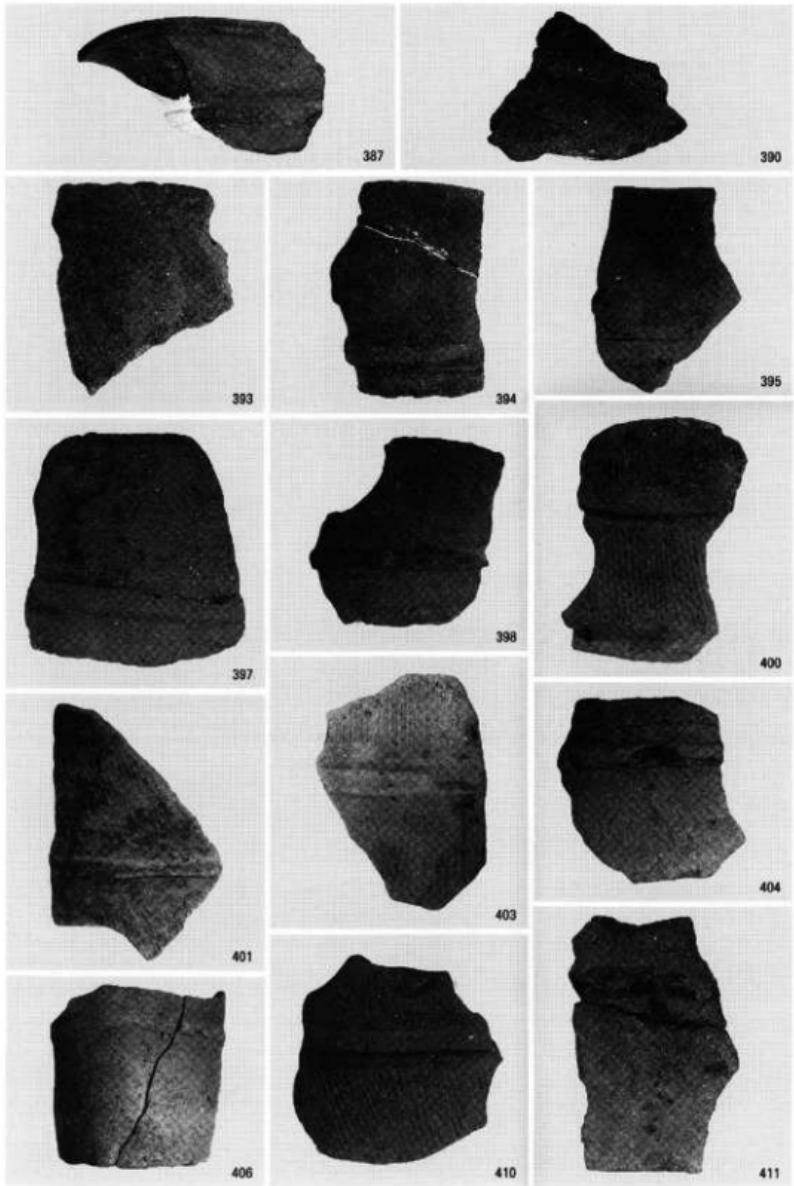


339

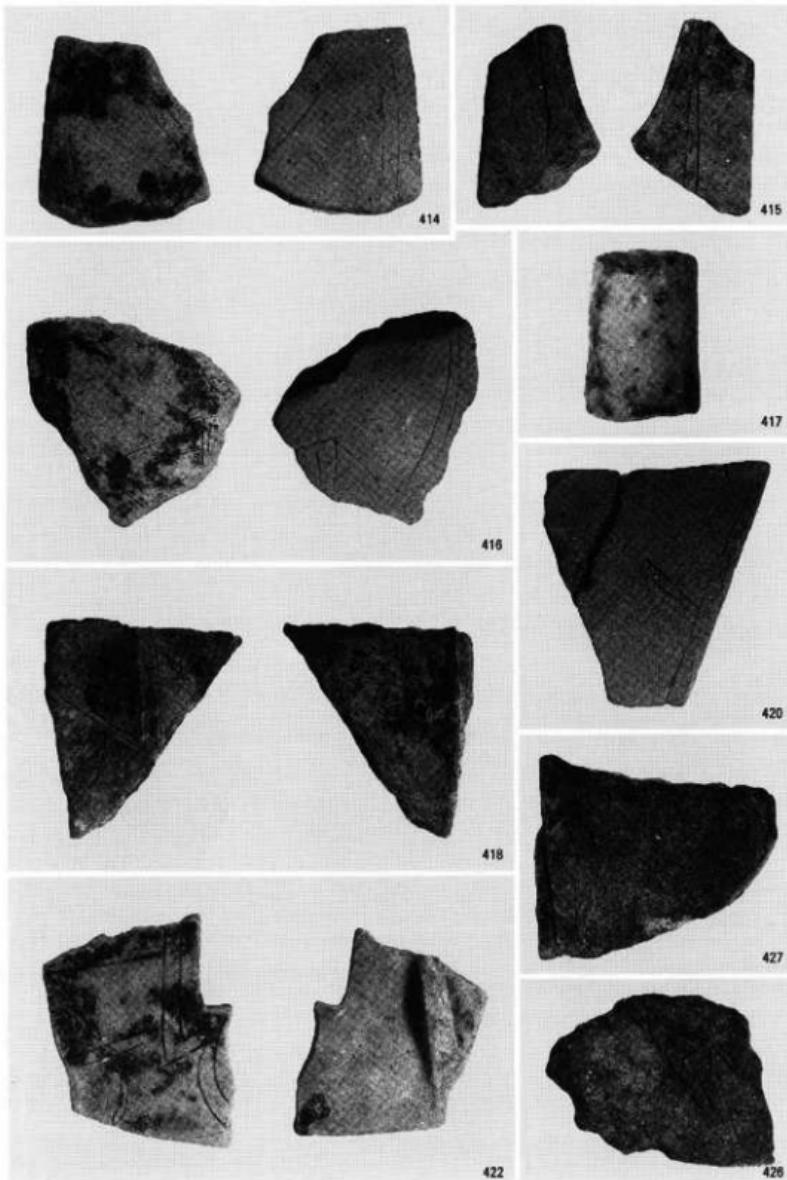
西区第4層出土遺物



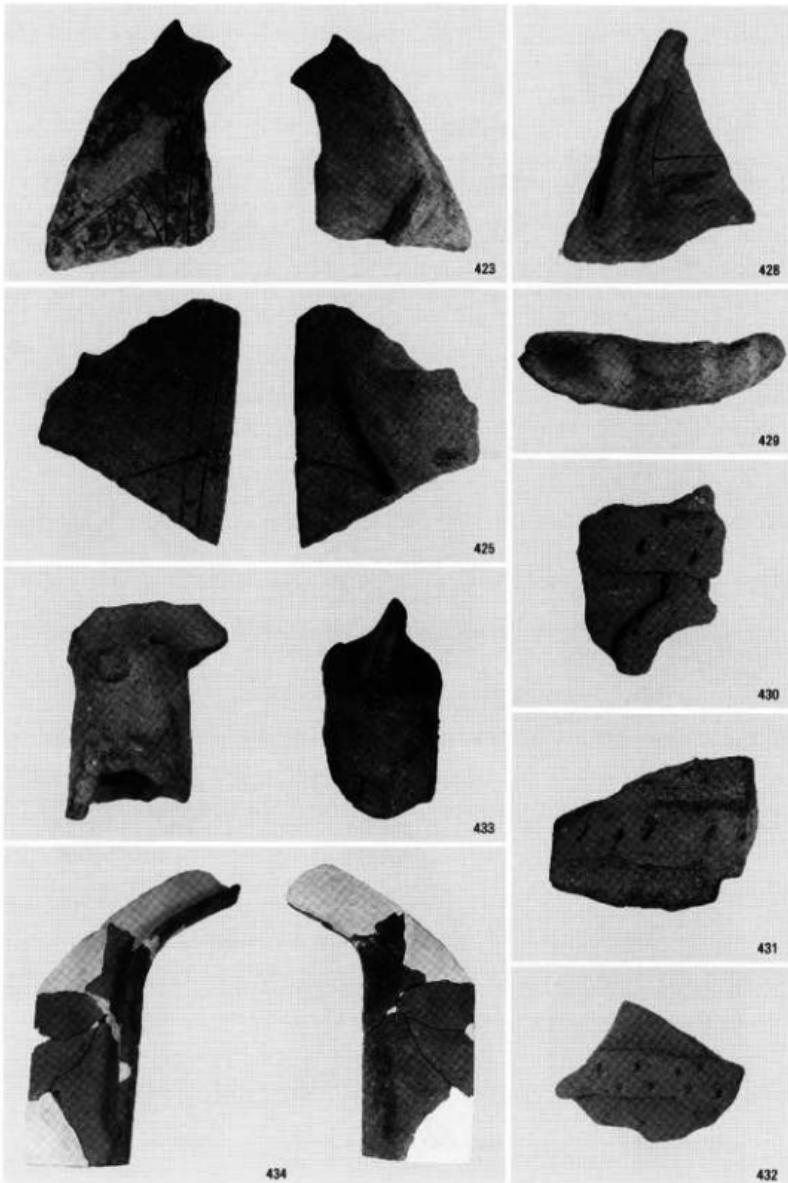
西区第4层出土遗物



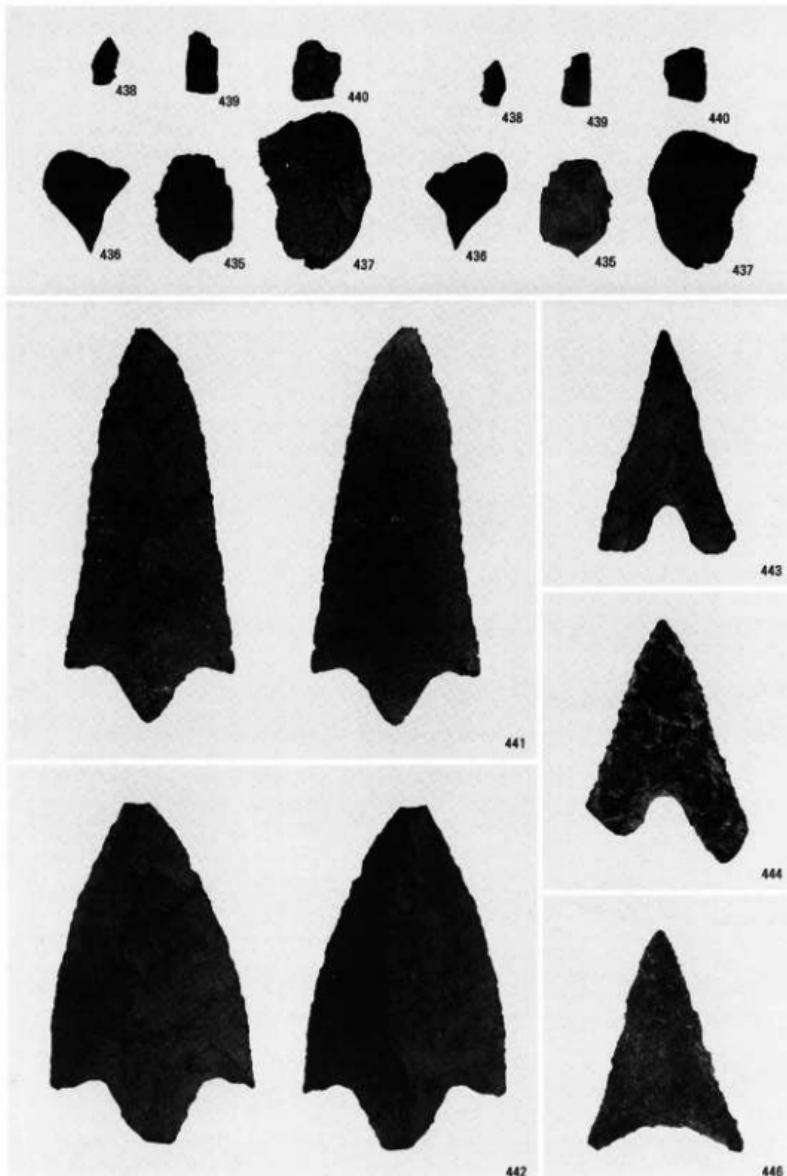
西区第4層出土遺物



西区第4層出土遺物



西区第4層出土遺物



下層確認調査出土遺物

II 八尾南遺跡第12次調査（YS88-12）発掘調査報告

例　　言

1. 本書は、八尾市若林町2丁目147番地で実施した工場建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第12次調査（YS88-12）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第42号 昭和63年6月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が株式会社小倉屋山本食品から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和63年8月29日から昭和63年10月21日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積860m²を測る。調査においては中切孝彦・八元聰志が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成7年1月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は遺物実測－中西隆子、図面レイアウト－原田、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	131
第2章 調査概要	131
第1節 調査の方法と経過	131
第2節 基本層序	132
第3節 検出構造・出土遺物	133
第3章 まとめ	143

挿 図 目 次

第1図 基本層序模式図	132
第2図 調査区設定図および地区割図	133
第3図 検出遺構平面図	134
第4図 2号墳(1)、4号墳(2)出土遺物実測図	135
第5図 1号墳~3号墳平面図および周溝断面図	136
第6図 SW-1 平断面図	137
第7図 SW-1 出土遺物実測図	138
第8図 4号墳平面図および周溝断面図	139
第9図 SP-3(13)、SP-10(14)出土遺物実測図	139
第10図 包含層出土遺物実測図	141

写 真 目 次

写真1 北区北壁(Y10付近)	132
-----------------------	-----

図 版 目 次

図版一 南区全景
図版二 北区全景
図版三 南区1号墳~3号墳検出状況
南区1号墳・2号墳検出状況
図版四 南区2号墳東周溝内遺物出土状況
南区SW-1検出状況
図版五 北区3号墳・4号墳検出状況
北区4号墳検出状況
図版六 2号墳、SW-1出土遺物

第1章 調査に至る経過

八尾南遺跡は、河内台地の東縁から河内低地に位置する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市南西部の若林町1～3丁目・西木の本1～4丁目の東西0.5km、南北1.4kmがその範囲とされている。

昭和53年以降、八尾南遺跡調査企・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・助八尾市文化財調査研究会により、発掘調査が継続して実施されており旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。これらの調査結果を総合すれば、遺跡範囲の中央部以南では旧石器時代以降の遺構・遺物が検出されているのに対して、北部では弥生時代後期以降に開発が顕在化する等の違いが認められている。このような違いの背景としては、遺跡範囲の中央部付近（地下鉄谷町線八尾南駅付近）が、河内台地の北端から河内低地に移行する変化点にあたり、この地点を境に南部と北部で地形的条件が異なっていたことによるものと推定されている。

今回の発掘調査は、遺跡範囲の南部にあたる八尾市若林町2丁目147番地で、八尾市教育委員会が昭和63年6月9日に実施した工場建設に伴う遺構確認調査で、弥生時代～平安時代の遺物が検出されることから発掘調査を実施するに至ったものである。現地での発掘期間は、昭和63年8月29日から昭和63年10月21日で、調査面積は860m²を測る。報告書作成にかかる業務は、現地発掘調査終了後、平成7年1月31日まで随時実施した。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

調査では当初、建物の構築予定地の南側と北側に2箇所の調査区（南区5×55m・北区5×41.5m）を設定し南区から調査を開始した。重機により、現地表下1.4m前後（標高11.30m前後）に存在する第3層淡灰茶色細粒砂～中粒砂層上面までの掘削を行った結果、方墳の周溝と推定される溝状遺構を検出した。このため、これらの調査経過を市教育委員会に報告し、協議を重ねた結果、南区と北区の間を含めた全域を調査対象とすることが決定された。従って調査途中で調査面積が483.5m²から860m²に変更された為、調査期間も当初の昭和63年8月29日～10月8日から10月21日に延長した。なお、調査面積の増大に伴い、掘削排土が内部で処理出来ない等の問題から、調査地を南区と北区に二分する方法を取った。掘削に際しては、重機により

地表下1.2mまで掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下1.4m前後（標高11.30m）付近に存在する第3層淡灰茶色細粒砂～中粒砂層上面で、古墳時代中期末～後期前半に比定される方墳4基（1号墳～4号墳）・土坑1基（SK-1）・土器集積1箇所（SW-1）・溝1条（SD-1）と時期不明の小穴19個（SP-1～SP-19）・溝1条（SD-2）を検出した。なお、上記の調査終了後、北区の北壁に沿って、東西方向にトレント（1×34m）を設定し、後期IH石器時代相当までの調査（下層調査）を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。遺物は、遺構内および第2b層・第3層から、弥生時代前期～中世に至る上器類・石器類がコンテナ箱に2箱程度出土したが、SW-1の出土遺物を除けば小片化したもののが大半を占めた。

第2節 基本層序

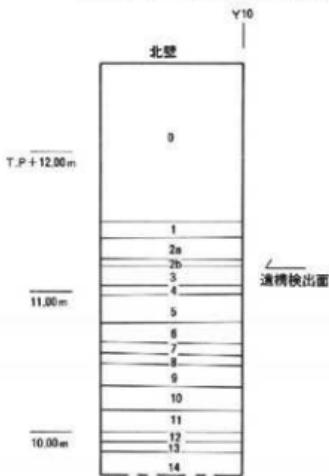
第0層 客土。層厚1.1m前後。地表面の標高はT.P.+12.65m前後。

第1層 旧耕土。暗灰色砂質土。層厚0.1～0.25m。

第2a層 床土。灰茶色砂質土。層厚0.15m前後。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着している。古墳時代中期以降の遺物が少量含まれている。

第2b層 茶灰色砂質土。層厚0.05～0.1m。第2a層よりやや濃い色調であるが、層相等は同様である。古墳時代中期以降の遺物が極少量出土している。

第3層 淡灰茶色細粒砂～中粒砂。層厚0.1～0.3m。弥生時代前期から中期の遺物が極少量出土している。上面が遺構検出面。



第1図 基本層序模式図

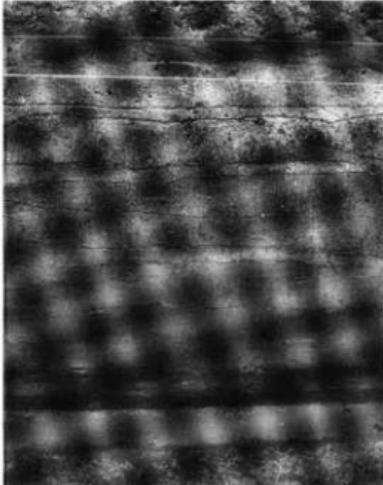


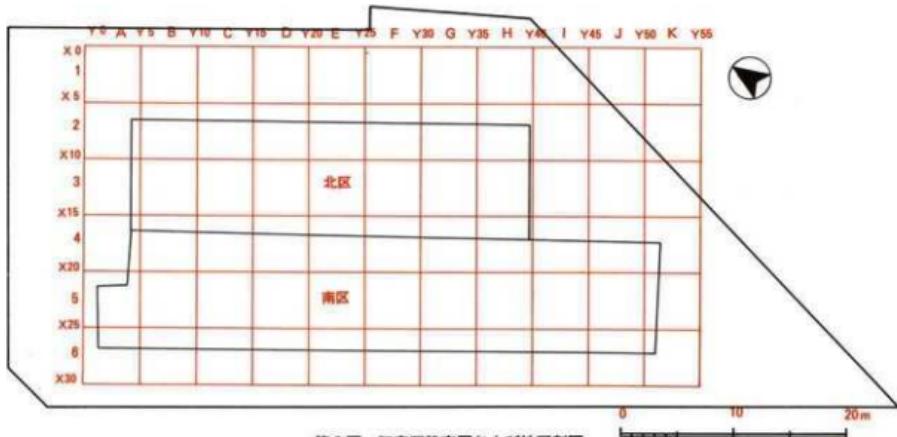
写真1 北区北壁（Y10付近）

- 第4層 橙茶色～暗灰色シルト～粘質土。層厚0.1m。
- 第5層 暗灰褐色細粒砂～粘質土。層厚0.1～0.2m。
- 第6層 淡灰橙色～灰褐色の色調で上部が細粒砂、下部がシルト～粘質土。層厚0.1～0.2m。
- 第7層 淡灰青色粘質シルト。層厚0.1～0.2m。
- 第8層 淡灰黒色粘土。層厚0.1m前後。
- 第9層 淡青灰色粘土。粘性の弱い粘土である。層厚0.1～0.2m。
- 第10層 青灰色粘土。層厚0.15m前後。
- 第11層 淡青色シルト～粘質土。層厚0.15m前後。
- 第12層 黒灰色粘土。粘性が強い。層厚0.1m前後。
- 第13層 灰黒色粘土。層厚0.05m前後。
- 第14層 灰黒色シルト～粘質土。層厚0.15m以上。

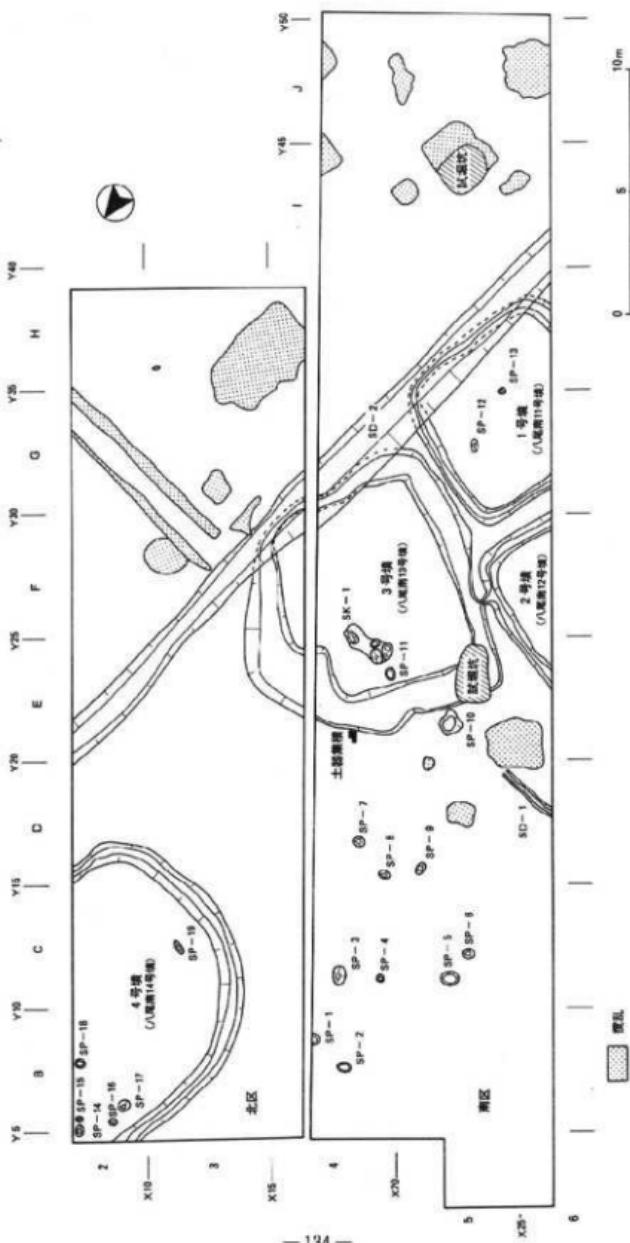
第3節 検出遺構・出土遺物

方墳

方墳は4基（1号墳～4号墳）を検出した。そのうち、1号墳～3号墳は南区の中央部に集中しており、主軸方向もほぼ一致している。北区の西部で検出した4号墳は、3号墳の北西約8mに位置しており、主軸方向や周溝規模が1号墳・2号墳と共通している。4基共に墳丘の大半が後世に削平を受けており、埋葬主体は検出されていない。



第2図 調査区設定図および地区割図



第3图 掘出道路平面图

1号墳（八尾南11号墳）

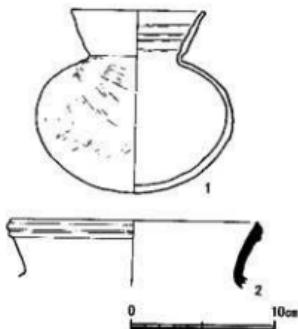
南区の中央部で検出した。南西部は調査区外に至る。また、東周溝の上部はSD-2によって削平を受けている。墳丘の平面形は方形を呈し、方向は南北軸に対しN-20°-Eを示す。一辺の規模は東西6.2m・南北6.0mを測る。周溝の断面はほぼU字形を呈し、幅0.55~0.75m深さ0.25~0.42mを測る。周溝内部の埋土は、基本的に2層で上層が暗灰茶色砂質土で下層は灰色砂質土である。ただし、東周溝の上部はSD-2によって削平を受けているため、下層のみを検出したにすぎない。なお、墳丘内で小穴2個(SP-12・SP-13)を検出したが、1号墳との関連は不明である。遺物は出土しなかった。

2号墳（八尾南12号墳）

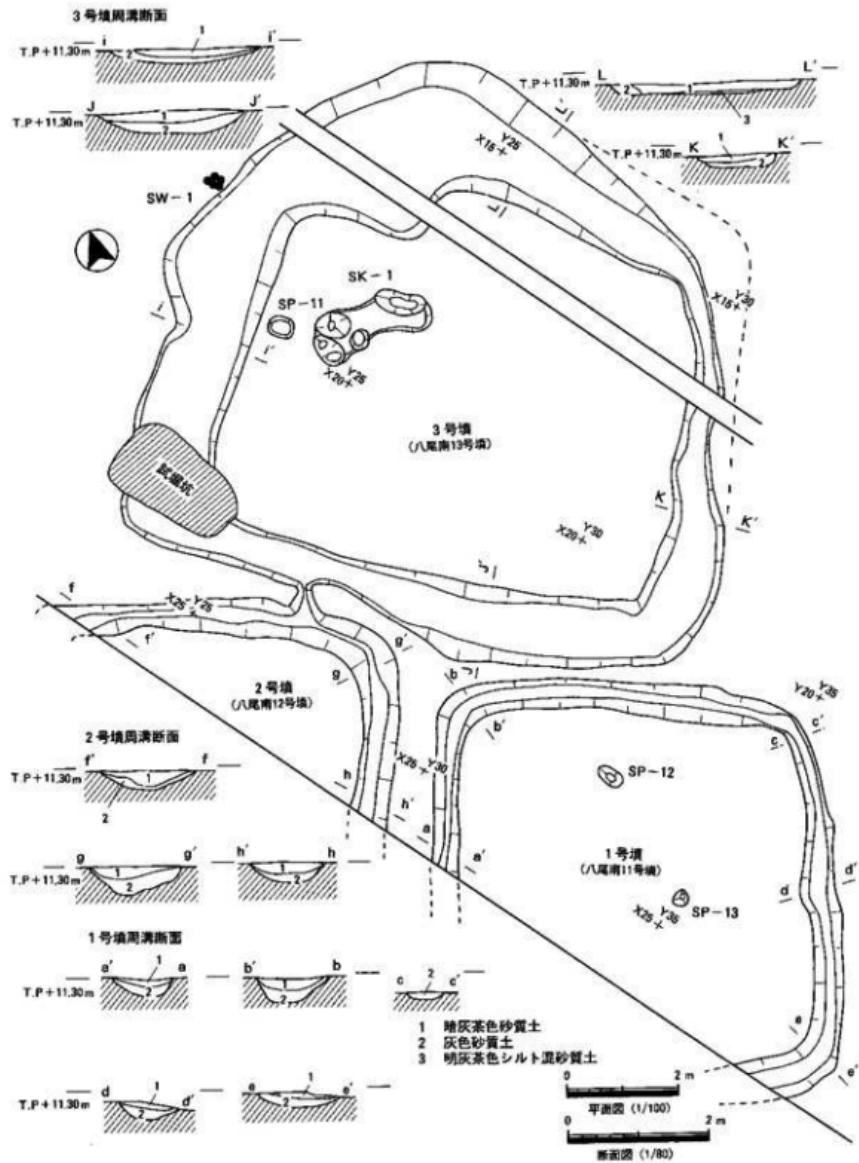
1号墳の西側に位置するもので、方墳の北東隅を検出した。南側は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分の北辺で4.4mを測る。方向は南北軸に対してN-20°-Eを示す。なお、北周溝と3号墳の南周溝をつなぐ小溝(幅0.2~0.5m・長さ0.4m)が存在しているが、意識して開削されたものか、偶発的な作用で出来たものかは区別し得ない。周溝は断面U字形を呈し、幅0.7~0.85m、深さ0.15~0.25mを測る。周溝内部の埋土は1号墳と同様である。なお、下部の一部には黒褐色粘質土が堆積しており、一時期滲水していたことが窺える。遺物は東周溝で完形の土器直口壺(1)が出土している。(1)は球形の体部から上外方に直線的に伸びる口頭部が付く直口壺で、口径9.4cm、器高13cm、体部最大径13.9cmを測る。口頭部内面に強いヨコナデによる沈線状の渦みが巡る。体部外面にはハケナデが施されている。明赤茶色の色調で胎土には0.1~1mm大の石英・長石粒が多量に含まれている。

3号墳（八尾南13号墳）

1号墳・2号墳の北側に位置する。墳丘の平面形は不整の長方形を呈し、方向は南北軸に対しN-21°-Eを示す。一辺の規模は、東西幅7.9m、南北幅5.6~6.8mを測る。周溝は東周溝がSD-2によって削平を受けているが、検出部分で幅0.45~2.9m、深さ0.15~0.2mを測り、溝底面は水平な面を有している。周溝内部の埋土は2号墳と同様であるが、北周溝では最下層に明灰茶色シルト混砂質土が堆積している。また、南周溝の西側部分では周溝幅が狭くなる部分が認められることから、2号墳が築造された後に3号墳が築造されたものと考えられる。墳丘部および周溝内からは遺物は出土していないが、周溝北西隅の外側で3号墳に関連すると思



第4図 2号墳(1)、4号墳(2)
出土遺物実測図



第5図 1号填～3号填平面図および周溝断面図

われる須恵器蓋杯が5組が集中して出土する上器集積(SW-1)が検出されている。また、墳丘の北西部で土坑(SK-1)および小穴(SP-11)を検出したが、その性格や時期は不明である。

土器集積(SW)

SW-1

3号墳の北西隅で検出した。周溝に接近した位置に存在しており、周溝の外側ラインとの間隔は7cmを測る。上器集積は、須恵器蓋杯のセットを南側で3組、西から蓋杯(3・4)、蓋杯(5・6)、蓋杯(7・8)と北側で2組、西から蓋杯(9・10)、蓋杯(11・12)の計5組の蓋杯で構成されている。検出時点では、杯身5点は完存していたが杯蓋(3・5・9)については、後世の削平のため小片化しており、部分的に欠損した箇所が認められた。

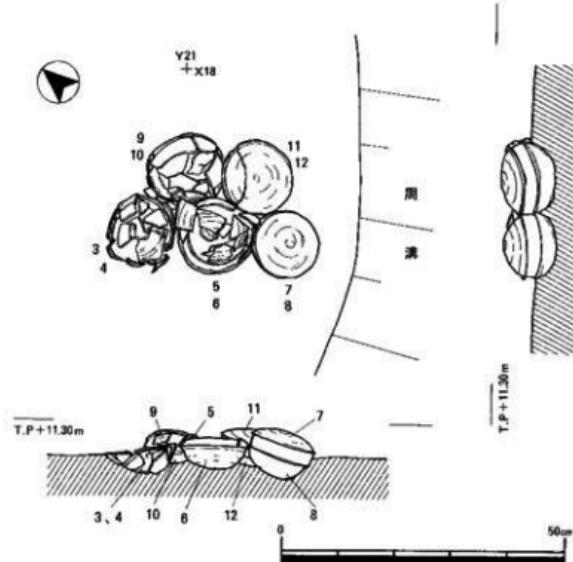
杯蓋5点(3・5・7・9・11)は口径12.0~12.7cm、器高4.7~5.1cm、縁径12.1~12.5cmを測る。天井部はやや高く丸味を持つもので、軽く水平方向に伸びる縁から口縁部がほぼ垂直に下るもので、口縁端部はわずかに段を有し内傾するものである。天井部のクロロ回転の方向は(9)が時計回り、(3・5・7・11)が逆時計回りである。色調は(5)は灰白色であるが他の青灰色で、焼成は良好堅緻である。杯身5点(4・6・8・10・12)は口径10.5~11.4cm、器高5.1~5.7cm、受

部径12.3~13.1cm、

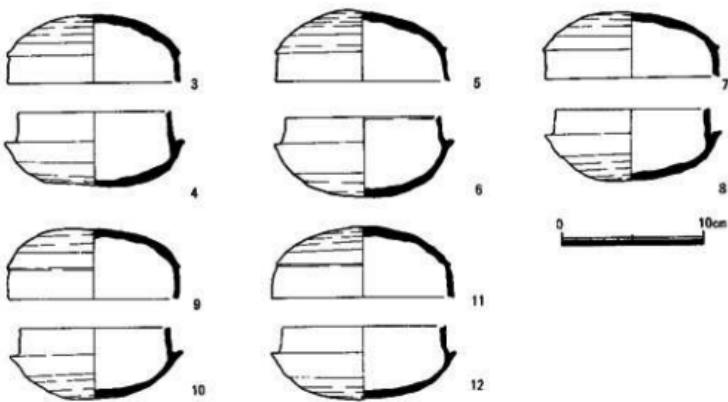
立ち上がり高1.6~
2.1cmを測る。底体

部の形態では深くて
丸い(8)の他はや
や深くて丸味をもつ
ものである。立ち上
がりは、概ね内傾し
て伸びるもので(4)
が2.1cmとやや高い
が、他は1.7cm前後

を測る。受部は外上
方に短く伸びる。口
縁端部はわずかな段
を有し内傾する(4・
6・10・12)と半で



第6図 SW-1 平断面図



第7図 SW-1出土遺物実測図

内傾する（8）がある。底体部のロクロ回転の方向は（4・6）が時計回り、（6・10・12）が逆時計回りである。色調は（6）が灰白色であるが、他は青灰色で焼成は（6）がややあまり他は、良好堅緻である。杯身（6）がやや新しい様相を呈しているが他は、TK23型式に対比されよう。

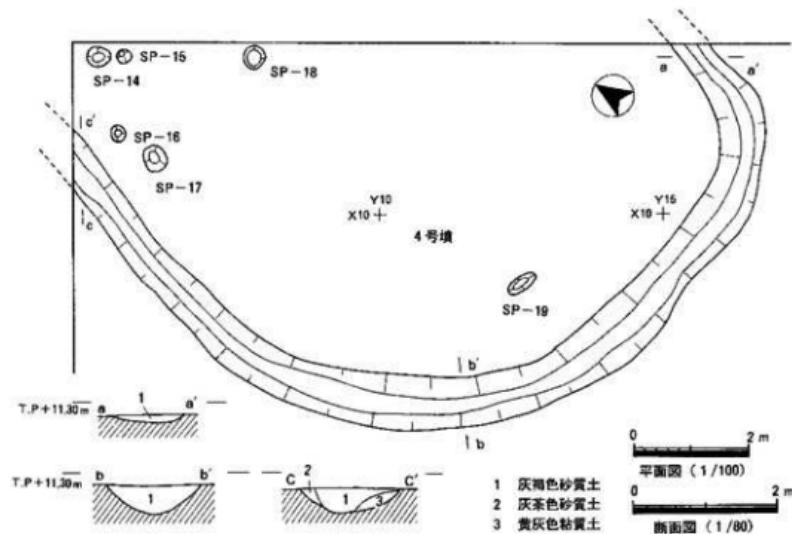
4号墳（八尾南14号墳）

北区の北西隅で検出した。北部および北西部は調査区外に至るため全容は不明であるが、埴丘の平面形は橢丸胴張り方形を呈するものと推定される。方向は南北軸に対してN-10°-Eを示す。一边の規模は検出した南辺で8.5mを測る。周溝は断面U字形を呈し、幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.3mを測る。周溝内の埋土は大半が灰褐色砂質土である。遺物は周溝内から須恵器杯身・杯蓋・壺の小片が極少量出土している。そのうち岡化できたものは須恵器広口壺（2）の1点である。（2）は広口壺の口頸部の1/3程度が遺存するもので、復元口径17.3cmを測る。頸部は上外方にゆるやかに伸びるもので、端部は肥厚し、外端面下部に1条の凹線が巡らされている。灰白色の色調で焼成は良好堅緻である。MT15型式に対比されよう。

土坑（SK）

SK-1

3号墳の埴丘部で検出した。椭円形を呈し、長径2.1m、短径0.6mを測る。断面の形状は浅い皿状を呈するが、底部には小穴状の窪みが4個存在している。遺物は出土しておらず縄文期や3号墳との関係は不明である。



第8図 4号墳平面図および周溝断面図

溝(SD)

SD-1

南北で検出した。北東-南西方向に伸びるものであるが、南側は調査区外に至るため不明である。検出長2.5mを測り、幅0.3~0.4m、深さ0.04~0.13mで南に向かって深くなっている。断面の形状はU字形である。埋土は灰色砂質土1層である。遺物は出土していない。

SD-2

調査区の中央部を南北方向に伸びる溝で、1号墳と3号墳の東周溝の上部を切っている。流路方向がほぼ磁北方向に一致していることから、条里造制を踏襲した溝であると考えられる。遺物は近世に比定される国産磁器の小片が少量出土している。

小穴(SP)

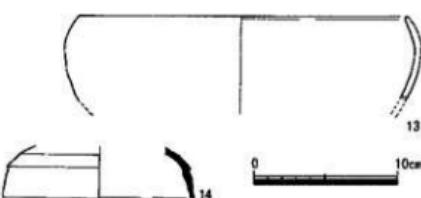
全体で19個 (SP-1~SP-19)

検出した。上面形状は円形ないしは椭円形を呈し、規模は幅0.3~0.7m、

深さ0.11~0.37mを測る。埋土は、

SP-9・SP-19が淡灰色砂質土

である他は淡褐色砂質土である。



第9図 SP-3 (13), SP-10 (14) 出土遺物実測図

遺物は S P - 3 から上師器鉢 (13)、S P - 10 からは須恵器杯蓋 (14) が出土した。(13) はいわゆる鉄鉢形を呈するもので復元口径23.3cmを測る。全体に丁寧な作りで、体部上半から口縁部にかけてはヨコナデ調整が行われている。胎土には精良な粘土が使用されている。色調は淡赤茶色で焼成は良好である。奈良時代に比定されるものである。(14) は須恵器杯蓋の天井部から口縁部にかけての資料である。復元口径13.6cmを測る。鈍く短い稜から口縁部が下外方に下るもので、端部は段を有し内傾している。色調は外面とともに青灰色で、器内部分は紫灰色である。外面全体に灰かぶりが認められる。古墳時代中期末に比定されよう。

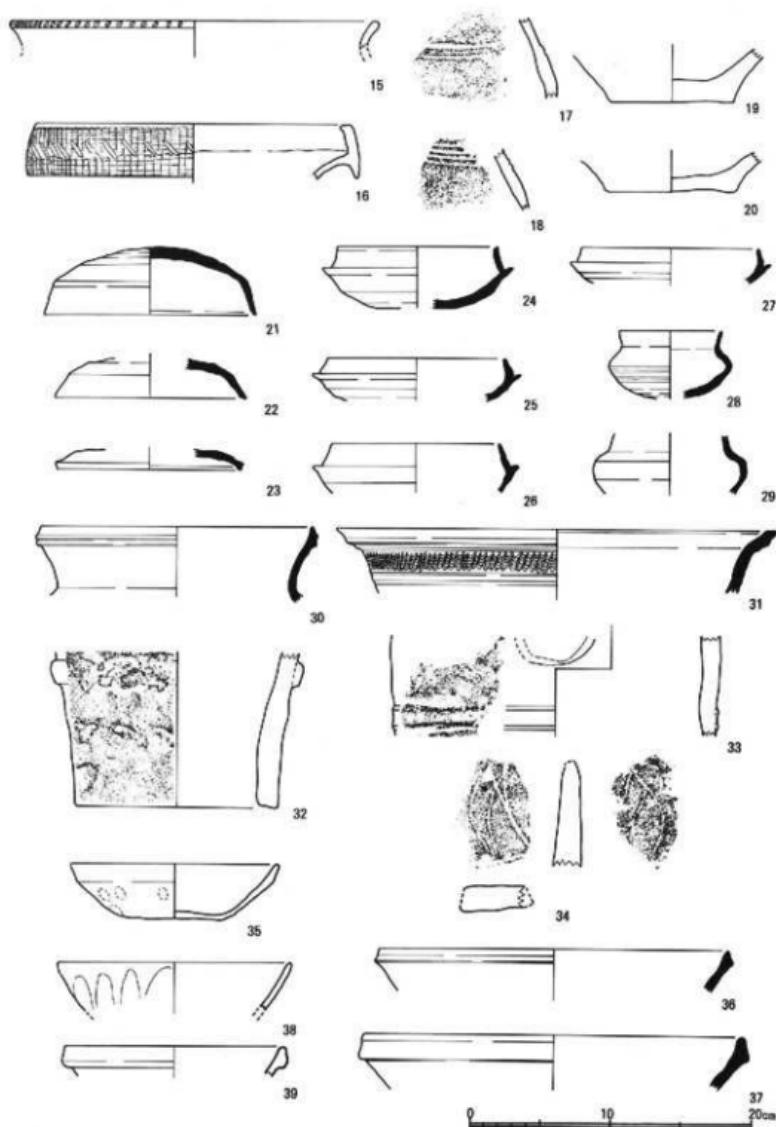
包含層出土遺物

遺物は第2b層および第3層から出土している。全体に小片化したものが大半で、量的にもコンテナ箱に半分程度である。時期的には弥生時代前期～中世に亘るもので、種別では弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・瓦器碗・白磁・青磁・圓窓陶磁器・屋瓦のほか、サヌカイトの刺片等がある。図化し得たものは25点(15～39)である。

弥生土器 - 6点(15～20)を図化した。(15)が壺、(16～20)が壺である。時期的には(16)が中期後半(畿内第IV様式)であるが、そのほかは前期(畿内第I様式)に比定されるものである。

(15)は口縁端部に刻目をもつ壺で復元口径26.0cmを測る。2G・II地区出土。(16)は広口壺で復元口径22.3cmを測る。上下に大きく拡張する口縁部を有するもので、外面には簾状文を上下2段に配し、その間に列点文が施文されている。生駒西麓産である。4F～H地区出土。(17・18)は広口壺の体部から頸部にかけての小片である。体部と頸部の境に段を有する(17)と沈線を有する(18)がある。(17)は生駒西麓産である。(17・18)はともに2G・H地区出土である。(19・20)は壺の底部で底径は(19)が8.7cm、(20)が9.1cmを測る。ともに胎土には、石英・長石・チャートの小粒が多量に含まれている。(19)が4F地区、(20)が5H地区出土である。

須恵器 - 11点(21～31)を図化した。種別では、杯蓋3点(21～23)、杯身4点(24～27)、短頸壺2点(28・29)、広口壺1点(30)、器台1点(31)である。(21)はやや高く丸みを持つ大井部を有する杯蓋で、口径15.0cm、器高4.8cmを測る。稜は退化しており、大井部と口縁部との境に凹線を巡らしている。TK10型式に対比される。5D～1地区出土。(22)は口縁部が%程度遺存するもので、口径13.5cmを測る。低くて丸い大井部を有するもので、口縁端部は段を有し内傾している。3・4EF地区出土。(23)は大井部中央部を欠損しているが、宝珠つまみを有する杯蓋である。8世紀以降に比定されるものである。2A～J地区出土。杯身は4点(24～27)図化したが(24)が%程度遺存している他は小片である。(24)は丸味をもつ底休部から立ち上がりが短く内傾して伸びるもので、端部は段を有し内傾して終る。TK23



第10図 包含層出土遺物実測図

～TK47型式に対比されよう。3・4 CD地区出土。(25・27)は受部が上外方に短く伸びるもので、立ち上がりは短く内傾している。TK10型式に対比されよう。ともに、3・4 F～II地区出土である。(26)は立ち上がりが前記のものに比して長く、受部も水平方向に伸びるものでMT15型式に対比されよう。5 B地区出土。(28)は扁球形で体部の最大径がやや上位に位置する体部から上外方に伸びる短頸壺である。口径7.2cm、体部最大径8.9cmを測る。体部上半にカキ目、II縁部から体部上半にかけて灰かぶりが認められる。5 DE地区出土。(29)は口縁部および底部を欠損するものである。体部外面に回転ヘラケズリが行われている。5 HI地区出土。(30)は広口壺の口頸部で全体の1/3が遺存するもので、復元口径19.4cmを測る。口頸部がゆるやかに外反して伸びるもので、端部は肥厚し1条の凹線を巡らしている。3・4 BC地区出土。(31)は器台の杯部と推定されるもので、復元口径22.6cmを測る。口縁部の下方を肥厚させその部分に凸帯と凹帯が巡らしている。現存する杯部外面の上半には波状文と2本の凹線が認められる。色調は外面が青灰色～黒灰色、内面が灰白色である。灰かぶりが内面に認められる。2 D地区出土。

埴輪－(32)は円筒埴輪の最下段の資料で、復元底径は14cmを測る。タガは全周せず一部欠損しているが、遺存している部分のタガは、粘土紐を指で器壁に貼り付けただけの簡略化されたものである。外面調整は板状工具によるナデの後指ナデ、内面はナデを施している。2 A～G地区出土。(33)は円筒埴輪の小片で、タガは偏平で「M」字形を呈している。2・3 A地区出土。(34)は両面に線刻による装飾が認められるため、衣笠形埴輪の立ち飾り部分と推定されるが小片のため詳細は不明である。2 GH地区出土。

土師器－(35)は完形の土師器杯で口径14.8cm、器高3.9cm、底径6.5cmを測る。口縁部外面から体部内面ナデ。体部外面から底部にかけて指頭圧成形後ナデを施す。淡赤茶色の色調で、胎上には石英・長石の小粒が多量に含まれている。時期的には平安時代前期以降のものと推定される。2 B地区出土。

中世須恵器－(36・37)東播磨系の須恵器鉢である。2点ともに2 CD地区出土。

中国産磁器－(38)は体部外面に鏡のない蓮弁文を削り出す青磁碗で、釉色は淡い緑灰色である。全体に貢入が認められる。横田・森田氏分類の龍泉窯系青磁I類のI-5にあたり、13世紀中葉に比定されている。2 CD地区出土。(39)は玉縁口縁を有する白磁碗で、横田・森田氏分類のIV類のIV-2にあたり、11世紀中葉から12世紀初頭に比定される。3・4 BC地区出土。
註1

注

註1 横田賛次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』

第3章 まとめ

今回の調査では、方墳4基〔1号墳（八尾南11号墳）・2号墳（八尾南12号墳）・3号墳（八尾南13号墳）・4号墳（八尾南14号墳）〕が検出された。占墳の形状や配置みて、南区中央部から北区の南部にかけての3基の方墳（1号墳～3号墳）と北区の北西隅で検出された4号墳に区別することが可能である。1号墳～3号墳は近接して築造されていることや、主軸方向が概ね共通しており、血縁的な関わりの強い被葬者集団が推定される。3基のなかで、3号墳が墳丘規模や周溝幅において他を凌駕しており、これらの集団のなかでの優位性を可視的に示すものと考えられる。また、3号墳の北西隅周溝の外側で検出された須恵器の蓋杯5セットから成る土器集積（SW-1）についても、3号墳に関わる墓前祭祀に関わるものと推定される。なお、同様な祭祀形態は、八尾南第8次調査（YS87-8）で検出された八尾南8号墳でも検出註1されている。そこでは、周溝底から須恵器蓋杯7組、杯蓋1点、杯身1点、直口壺1点・短頸壺1点（田辺編年-TK47型式段階）から成る上器集積が検出されており、いずれも須恵器類で構成される土器類が一ヶ所に集中している点で共通しており、時期的には差があるものの、この地域における墓前祭祀の形態を推定するうえで重要である。一方、北区の北西隅で検出された4号墳については、北部が調査区外のため不明な点が多いが、検出部分からみて不整形の方墳と推定される。

構築時期については、3号墳が土器集積（SW-1）との関わりから、5世紀後半（田辺編年-TK23型式段階）の築造と推定される。2号墳については、3号墳の南周溝の西部が一部幅を減じている事実を2号墳の北周溝に規定されたものとすれば、2号墳→3号墳の構築順位が推定される。従って、2号墳の構築時期はTK23型式段階ないしはそれ以前と推定される。1号墳についても、時期を示す遺物が出土していないが、2号墳に近い時期が推定される。1号墳～3号墳から離れた位置に構築されている、4号墳については、出土した広口壺の特長から6世紀前半（田辺編年-MT15段階）の築造が推定される。なお、包含層からは、極少量、埴輪類が検出されているが、今回検出した古墳に伴うものとは考え難く、調査地周辺に埴輪を保有した古墳が存在した可能性を想定する必要があろう。

以上、今回の調査ではこの地が、5世紀後半と6世紀前半（八尾南10期～八尾南11期）において墓域として利用されてきたことが明らかになった。本調査以外で、5世紀後半（八尾南10期）に比定される占墳が検出された例としては、第1次調査（YS82-1）で3基（八尾南4号墳～6号墳）、第2次調査（YS83-2）で1基（八尾南7号墳）、第8次調査（YS87-8）註3で3基（八尾南8号墳～10号墳）の計10基がある。一方、八尾南11期とした6世紀前半の古墳

としては、今回検出した4号墳（八尾南14号墳）が唯一のものである。ただ、現時点ではこれらと関わりを持つ遺物の検出が認められるものの、集落として捉えられる遺構が検出されておらず、今後これらの古墳造営を推進した集落の存在を追究していく必要があろう。

註

註1 本書掲載「I 八尾南遺跡第8次調査（YS87-8）」

註2 田辺昭二 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

註3 駒沢 敦 1984「3 八尾南遺跡」『昭和58年度事業概要報告』鶴八尾市文化財調査研究会報告 5 鶴八尾市文化財調査研究会

註4 駒沢 敦 1985「1 八尾南遺跡（第2次調査）」『昭和59年度事業概要報告』鶴八尾市文化財調査研究会報告 7 鶴八尾市文化財調査研究会

註5 前掲註1

図 版



南区全景（東から）



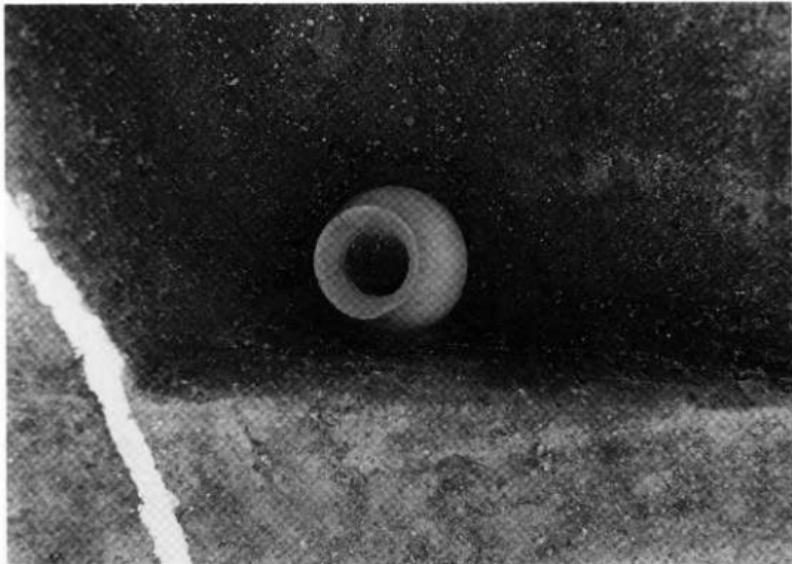
北区全景（東から）



南区1号墳～3号墳検出状況（南から）



南区1号墳・2号墳検出状況（南から）



南区2号墳東周溝内遺物出土状況（南から）



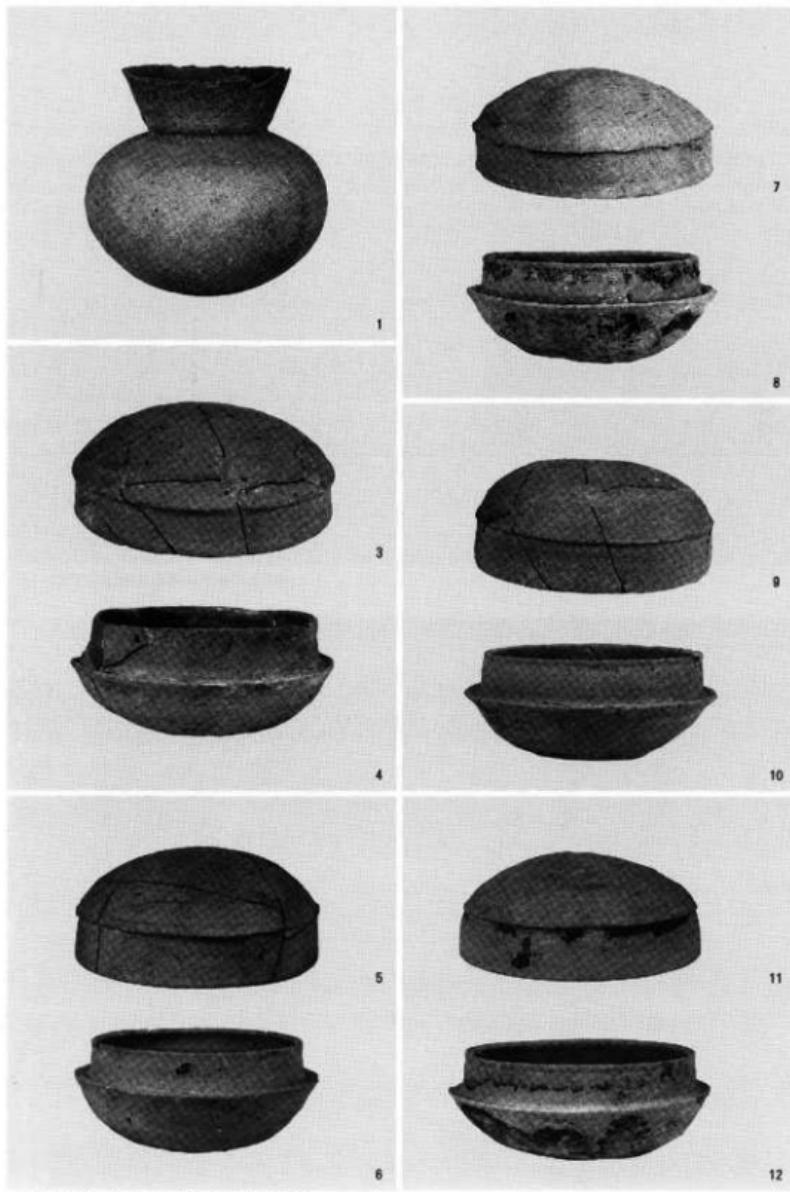
南区SW-1 掘出状況（南から）



北区3号墳・4号墳検出状況（東から）



北区4号墳検出状況（西から）



2号墳（1）、SW-1（3~12）出土遺物

III 八尾南遺跡第17次調査（YS90-17）発掘調査報告

例　　言

1. 本書は、八尾市若林町3丁目50番地他2筆で実施した社屋建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第17次調査（YS90-17）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第122号 平成2年12月21日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が株式会社佐々木電気製作所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年1月28日から平成3年2月27日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積436m²を測る。調査においては中西隆子・浜田千年・真柄竜・正木洋二・松下哲也・垣内洋平が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成7年1月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は遺物実測一沢村妙子、図面レイアウト一原田、図面トレース一北原清子、遺物写真一原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 火山灰分析については、株式会社京都フィッショントラックの塙原徹氏に依頼した。
1. なお、本調査地の土層と長原遺跡南部の層序の対比は、㈱大阪市文化財協会趙哲濟氏からご教示を受けた。記して謝意を表する次第である。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	145
第2章 調査概要	145
第1節 調査の方法と経過	145
第2節 基本層序	147
第3節 検出遺構・出土遺物	149
第3章 まとめ	166
付章 八尾南遺跡第17次調査の火山灰分析	169

挿 図 目 次

第1図 調査区設定図および地区割図	146
第2図 基本層序模式図	148
第3図 SK-1、SK-4、SK-5出土遺物実測図	149
第4図 検出遺構平面図（上層遺構）	150
第5図 SK-4 平断面図	151
第6図 SK-5・6 平断面図	152
第7図 SK-8 平断面図	153
第8図 SK-15・16平断面図	155
第9図 SK-19平断面図	155
第10図 SK-6、SK-8、SK-12、SK-15、SK-22出土遺物実測図	156
第11図 SD-2、SD-3、SD-4、SD-5、SD-9出土遺物実測図	158
第12図 SP-55出土遺物実測図	160
第13図 西トレンチ包含層（第4層）出土遺物実測図	161
第14図 SK-26・27平断面図	162
第15図 SK-23、SK-26、SK-30、SK-31出土遺物実測図	163
第16図 SD-13出土遺物実測図	164
第17図 東トレンチ包含層（第4層）出土遺物実測図	165
第18図 下層調査グリッド設定図	166

写 真 目 次

写真1 SD-4広口壺出土状況（北から）	158
写真2 第9グリッド調査風景（南から）	165

図 版 目 次

図版一 西トレンチ全景	図版五 西トレンチSK-14~16検出状況
図版二 東トレンチ全景	西トレンチSK-19検出状況
図版三 西トレンチ南部遺構検出状況	図版六 東・西トレンチ下層確認グリッド
東トレンチ南部遺構検出状況	図版七 下層確認グリッド（1~8グリッド）
図版四 西トレンチSK-5・6 検出状況	図版八 SK、SD、SP出土遺物
西トレンチSK-8 検出状況	図版九 SD、東西トレンチ包含層出土遺物

第1章 調査に至る経過

八尾南遺跡は、河内台地の東縁から河内低地に位置する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市南西部の若林町1～3丁目・西木の木1～4丁目の東西0.5km、南北1.4kmがその範囲とされている。

昭和53年～昭和54年にかけて、八尾南遺跡調査会により行われた地下鉄谷町線延伸工事に伴う調査で旧石器時代から中世に至る複合遺跡として認識されて以来、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により28次（平成7年1月現在）にわたる調査が実施してきた。それらの調査結果から、沖積作用が緩慢で、比較的浅い位置に旧石器の基盤面である沖積層下部層が存在する遺跡範囲の中部以南では、旧石器・縄文および稻作受容期である弥生時代の初期の段階に開発が行われているのに対して、沖積作用が著しい遺跡北部では開発時期が弥生時代後期以降であったことが確認されている。

今回の調査地ある八尾市若林町3丁目50番地は遺跡範囲の南部に位置し、昭和58年に当調査研究会が調査を実施し、弥生時代後期の方形周溝墓10基、古墳時代中期末から後期初頭の方墳5基、平安時代後期の集落等を検出した第1次調査地（YS82-1）に隣接している。発掘調査は株式会社佐々木電気製作所の社屋建築工事に伴うもので、発掘調査面積は436m²を測る。現地調査期間は平成3年1月28日から平成3年2月27日までの26日間である。報告書作成にかかる業務は、現地発掘調査終了後平成7年1月31まで随時実施した。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は社屋の建築工事に伴うもので、建築物の基礎部分を調査対象とした。調査区の設定に当っては、南北方向の基礎部分に合わせて2本のトレンチ（東トレンチ6×50m・西トレンチ4×34m）を並列に配置する方法を取った。調査面積は436m²を測る。調査区の地区割については、東西25m、南北50mにわたりて設定した。設定した一区画の単位は5m四方で、北西隅を基準点として東西方向はアルファベット（西からA～E）、南北方向は算用数字（1～10）で示し、地区的表示には1A地区～10E地区とした。地点の表示については、東西線X（X0～X50）、南北線（Y0～Y25）と設定し、X線とY線の交点の数値で示した。

調査では、弥生時代前期以降を対象とした上層調査と、縄文時代晚期から旧石器時代を対象とした下層調査に分けて実施した。上層調査の掘削に際しては、両トレンチともに重機により

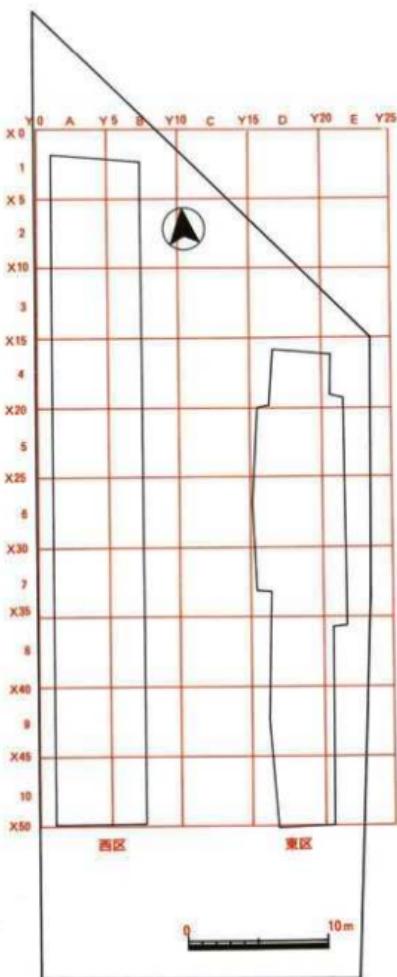
1.0m前後を掘削した後、以下0.3m前後については層理に従って人力掘削を行い、第5層上面での遺構検出に努めた。下層調査は上層調査終了後、各調査区内にグリッド（西トレント8箇所・東トレント2箇所）を設定し、人力掘削により第5層から第14層下部に至るまでを調査対象とした。なお、第5層から第12層までは、縄文時代全般の遺構・遺物の有無を確認することに主

眼を置いた。第12層から第14層下部について、旧石器時代相当層にあたることから、旧石器の検出と埋没古地形の復元を主目的とし、ひねり鎌（手ガリ）を使用して0.5m前後にわたる範囲の調査を実施した。両調査区の調査概要は下記のとおりである。

・西トレント

上層調査－地表下1.3m前後（T.P.+11.4m前後）に存在する第5層上面で、弥生時代中期（畿内第II・III様式）に比定される土坑22基（SK-1～SK-22）、溝12条（SD-1～SD-12）、小穴78個（SP-1～SP-78）を検出した。

下層調査－上層調査の終了後、基礎杭構築部分にグリッド（2.5×2.5m）を8箇所（北から第1グリッド～第8グリッド）を設定した。調査の結果、第5層から第12層までの土層内からは、遺構・遺物は検出されなかった。第12層から第14層下部までの旧石器相当層を対象とした調査でも、旧石器は出土していない。埋没古地形に関しては、第2グリッドで小規模な河川の存在が想起される水成層が確認されたほかは、第13層上面の標高が北部の第1グリッドでT.P.+10.1m、南部の第8グリッド



第1図 調査区設定図および地区割図

ドでは T.P.+10.2m 前後と比高差も僅かであった。

・東トレンチ

上層調査 調査地の北端から約1.5m 地点より南側約17m にわたって、現表土下3m におよぶ大規模な擾乱を受けていたため、この部分については安全面を考慮して上幅を拡張した。この擾乱のため、上層調査は調査区の約半分が調査不能になったほか、一部は旧石器相当層である13層に達する箇所がみられた。調査の結果、地表下1.3m 前後(T.P.+11.4m 前後)付近に存在する第5層上面で、弥生時代中期(畿内第II・III様式)に比定される上坑10基(SK-23~SK-32)、溝1条(SD-13)、小穴10個(SP-79~SP88)を検出した。

下層調査 摆乱部分のなかで、擾乱が第14層下部におよんでいない部分に第9グリッド(X25~27.3地点)、第10グリッド(X31~32地点)を設定した。両グリッドともに第13層・第14層を調査対象としたが旧石器は出土しなかった。なお、第13層上面の標高はT.P.+10.1m 前後で、西トレンチの数値に等しい。

・出土遺物

遺物は第4層および遺構内から十器類・石器類およびサヌカイトの剥片がコンテナ5箱程度出土した。土器類は一部を除いて、そのほとんどが小片で、しかも酸性土壤のためか土器の表面の風化が進んだものが大半を占めた。土器類の帰属時期は弥生時代前期(畿内第I様式)から中期(畿内第II・III様式)に比定されるもので、そのうち前期のものは数点出土したのみである。石器類は石鏃・石槍・石庖丁のほかサヌカイトの剥片が出上している。なお、下層調査では十器類・石器類は出土していない。

第2節 基本層序

東トレンチで幅約17m、深さ3mにおよぶ大規模な擾乱跡が見られたが、それ以外は比較的安定した層相が確認された。調査区内で普遍的に確認された第1層から第14層を基本層序とした。なお、西接する長原遺跡の基本層序との整合性を高めるため、調査時に岡大坂市文化財協会の趙折済氏に層準の対比をお願いした。また、当地点における火山灰分析を㈱京都フィッショング・トラックの堀原徹氏に依頼した。(付章P169~186参照)

第0層 客土。層厚0.7~0.8m。上面の標高はT.P.+12.8m前後。

第1層 旧耕土。N6/0灰色極細粒砂。層厚0.1~0.2m。

第2層a 7.5GY7/1明緑灰色極細粒砂。層厚0.05~0.1m。

第2層b 2.5GY8/1灰白色極細粒砂~シルト。層厚0.05m前後。

第3層a 10YR5/1褐灰色極細粒砂~細粒砂。層厚0.03~0.1m。

NG 6~7層

第3層b 5Y8/3淡黄色細粒砂。層厚0.03~0.1m。

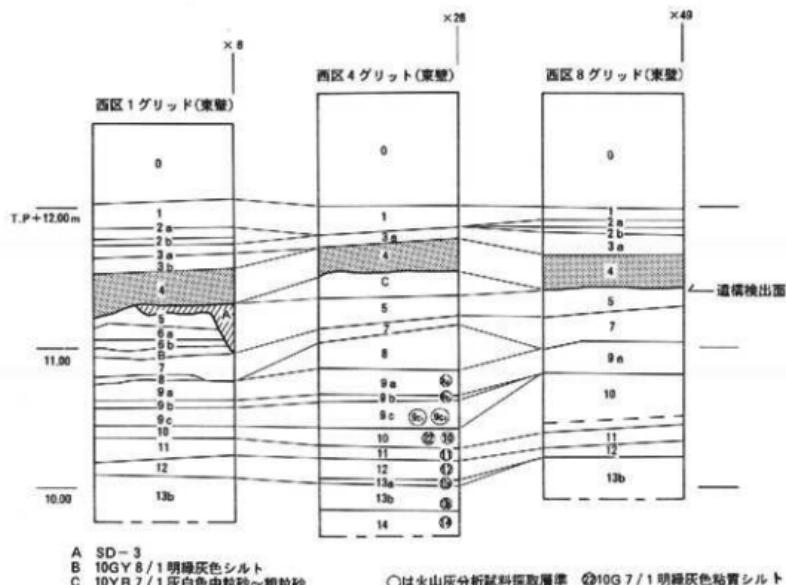
NG 6~7層

第4層 10YR4/1褐灰色細粒砂~中粒砂。層厚0.05~0.3m。

NG 8B層

弥生時代前期から中期の遺物を含む。

第5層	7.5 GY7/8黄橙色中粒砂。層厚0.1~0.3m。上面が遺構検出面。	NG 8 C層
第6層a	7 YR6/8橙色細粒砂。層厚0.1m前後。	NG 8 C層
第6層b	N7/0灰白色シルト。層厚0.1~0.25m。	NG 8 C層
第7層	7.5 YR7/1明灰褐色粘土。層厚0.1m。	NG 8 C層
第8層	2.5 Y8/1灰白色~10 GY8/1緑灰色シルト~細粒砂。層厚0.1~0.2m。	NG 8 C層
第9層a	10 BG5/1青灰色粘土。層厚0.1~0.25m。	NG 9 A層
第9層b	10 BG7/1明青灰色粘土。層厚0.05m前後。	NG 9 B層
第9層c	N5/0灰色粘土。層厚0.2m前後。	NG 9 C層
第10層	10 G6/1緑灰色粘土質シルト。層厚0.1~0.25m。	NG 10層
第11層	10 BG6/1青灰色粘土。層厚0.1~0.2m。	NG 11層
第12層	N6/0灰色シルト。層厚0.05~0.25m。	NG 12層
第13層a	2.5 GY8/1灰白色シルト。層厚0.05~0.1m。	NG 13A層
第13層b	5 Y8/4淡黄色~10 GY8/1明緑灰色シルト。層厚0.05~0.1m。	NG 13B層
第14層	10 GY8/1明緑灰色シルト。層厚0.2m。	NG 14層



第2図 基本層序模式図

第3節 検出遺構・出土遺物

1) 西トレンチ上層調査

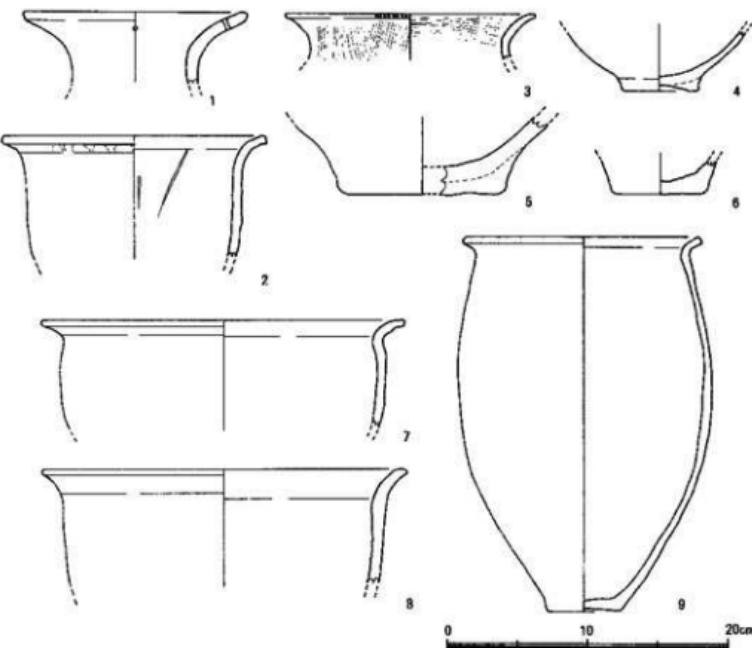
土坑(SK)

SK-1

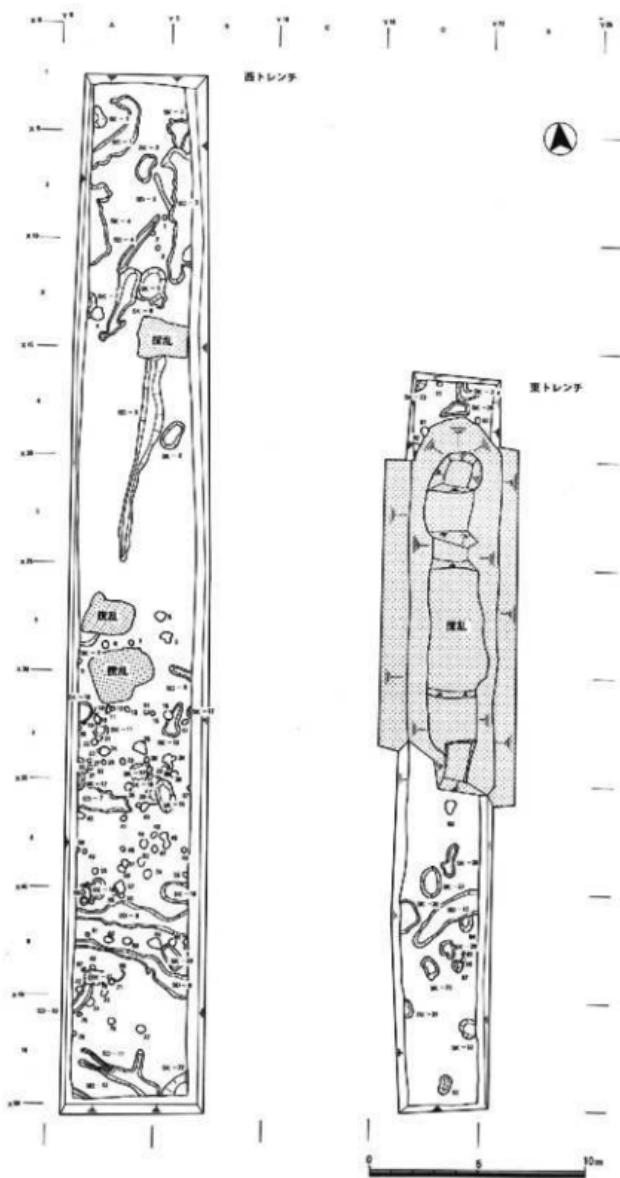
1A地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.62m、南北幅0.92m、深さ0.34mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層黄橙色細粒砂・第3層暗灰色細粒砂・第4層灰白色粘質シルトと灰色細砂の互層である。遺物は弥生中期前半(畿内第II様式)に比定される壺(1)が1点出土した。(1)は直上に伸びる頸部から口縁部が大きく外反する広口壺である。口縁端部直下に細孔を有する。胎土には、多量の石英・長石粒と微量のチャート粒が含まれている。焼成は良好で色調は褐灰色である。

SK-2

2A地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.8m、南北幅1.38m、深さ0.23mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂である。遺物は第



第3図 SK-1 (1)、SK-4 (2~6)、SK-5 (7~9) 出土遺物実測図



第4図 検出造構平面図（上層造構）

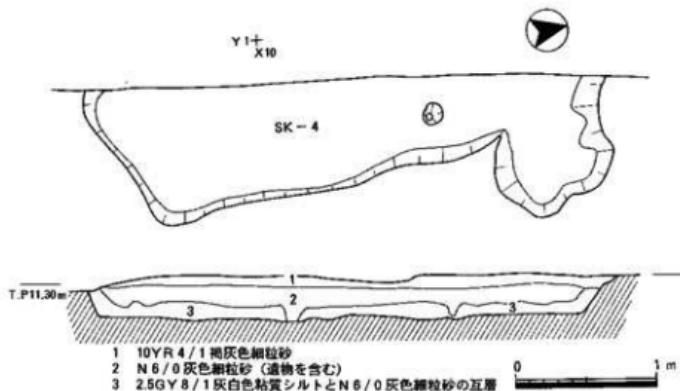
2層から弥生土器片1点出土したが、器種や時期は明確でない。

SK-3

1・2AB地区で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.98m、南北幅1.38m、深さ0.09mを測る。埋土は灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が4点出土したが、器種や時期は明確でない。

SK-4

2・3A地区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分では南北方向に長い溝状を呈する。検出部分は東西幅0.8m、南北幅3.68m、深さ0.3mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は第2層から弥生時代中期前半(畿内第II様式)の土器片が少量と、サヌカイトの剥片が7点出土した。5点(2~6)を図化した。(2・3)は甕である。(2)は口縁部が外反するもので、全体に風化が著しく調整等は不明である。復元口径18.8cmを測る。胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡灰色である。(3)は大和型の甕である。復元口径17.8cmを測る。口縁端部に細かい刻目が施されている。器面調整は外面が縱方向、内面が横方向にハケ調整が行われている。胎土には石英・長石・黒雲母が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡褐色である。(4)はあげ底の底部を有する鉢である。内外面ともにナデ調整が行われている。胎土はやや粗く石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は淡灰色である。(5・6)は甕の底部で(5)がやや人型で底径1.2cm(6)が中型で底径6.5cmを測る。(5)は生駒西麓産である。



第5図 SK-4平断面図

SK-5

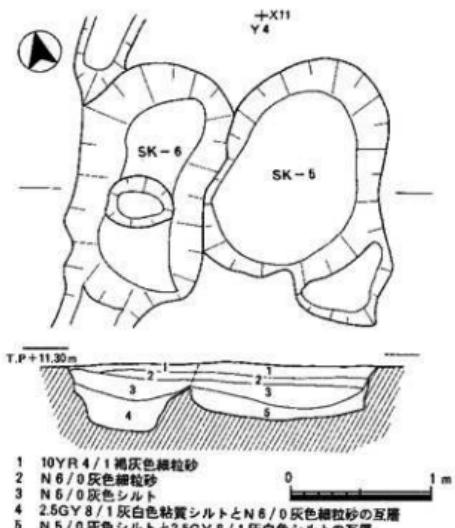
3A地区で検出した。南北方向に長い椭円形を呈するもので、南北幅1.3m、南北幅1.9m、深さ0.37mを測る。埋土は上層から第1層灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色シルト・第5層灰色シルトと灰白色シルトの互層である。遺物は第2層から弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の壺・甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が3点出土した。図化したものは3点（7・9）である。（7・8）は体部上半から口縁部が外反して伸びる甕で、2点ともに%程度が残存する資料である。（7）が口縁部が強く屈曲するのに対して（8）はゆるやかに外反する口縁部を有するが、口縁端部は共に丸味を持って終る。色調は（7）が淡褐色、（8）が灰白色で、前者は生駒西麓産である。（9）は全体の%程度が残存した甕で口径16.5cm、器高26.8cm、胴部最大径17.9cm、底径5cmを測る。底部は径が小さく、あげ底気味の底部を有する。胴部はやや軽身で長く伸びるもので、中位に最大径を持った後、底部に向かって内傾する。口縁部は強く屈曲し、端部は水平な面を持つ。器面調整は外面とともにナデ調整を行う。頸部と口縁部の境に指頭圧痕が認められる。胎土には長石・石英粒が多量に含まれている。焼成は良好で色調は褐色である。

SK-6

3A地区で検出した。SK-5の西部と接し、SD-4を切っている。南北方向に長い椭円

形を呈するもので、東西幅0.9m、南北幅1.8m、深さ0.5mを測る。埋土は上層から第1層灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色シルト・第4層灰白色粘質シルトと灰白色細粒砂の互層である。遺物は第2層～第4層から弥生時代中期前半～中頃（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）の壺・甕・高杯の小片が少量と、サヌカイトの剥片が3点出土した。図化したのは3点（10～12）である。（10）は細頸壺の体部から頸部に至る資料である。頸部外面に直線文が施文されている。胎土には、長石・石英が散見される程度の良好的な粘土が使

用されている。色調は褐色を呈する。（11）はLII縁部が外反する甕である。器面調整は両面ともにナデである。胎土に



第6図 SK-5・6 平断面図

は石英粒が多量に含まれている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。(12)は高杯の杯部の小片である。胎土には石英・長石・角閃石がわずかに散見される程度の精良粘土を使用している。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。

SK-7

3 A 地区で検出した。西部は調査区外に至るため全容は不明である。南東部は SP-4 に切られている。検出部分で東西幅0.38m、南北幅1.02m、深さ0.17mを測る。埋土は上層から第1層灰色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-8

4 A・B 地区で検出した。楕円形を呈するもので、東西幅0.84m、南北幅1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代中期前半（畿内第II様式）の土器片のほか、サヌカイトの剥片が1点出土した。2点（13・14）圓化した。(13)は甕の底部である。胎土はやや粗く、石英・黒雲母・角閃石のほか5mm大の長石が含まれている。褐灰色の色調を呈するもので、生駒西麓産である。(14)は鉢であげ底の底部を有する。底径5cmを測る。赤褐色の色調で、胎土には長石・石英・角閃石が多量に含まれている。

SK-9

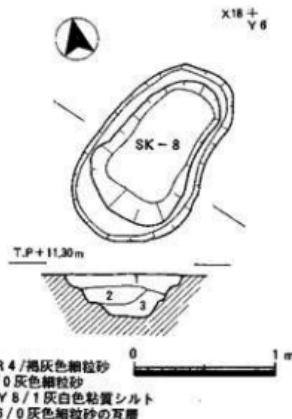
6 A 地区で検出した。北部が擾乱を受けており上面の形状は明確でない。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.6m、深さ0.11mを測る。埋土は上層から褐灰色細粒砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

SK-10

7 A 地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。南部の一部が SP-19 に切られているほか、土坑内の北部には小穴2個が存在している。検出部分で東西幅0.62m、南北幅0.9m、深さ0.09mを測る。埋土は灰色細粒砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

SK-11

7 A 地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、南部で SP-21 を切っている。規模は東西幅0.7m、南北幅0.58m、深さ0.09mを測る。埋土は第1層灰色粘質シルトと灰白色細粒砂の互



第7図 SK-8 平断面図

層・第2層褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-12

7A地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.2m、南北幅0.52m、深さ0.03mを測る。埋土は褐灰色細粒砂の單一層である。遺物は弥生時代中期中頃（畿内第Ⅲ様式）の壺・甕の小片が少量出土した。5点（15～19）図化した。（15～18）は壺、（19）は甕である。（15）は口縁部がゆるやかに外反するもので、器面全体が風化しており調整は不明である。橙色系の色調で、胎土には長石・石英が多量に含まれている。（16～18）は底部のみが残存したもので、底径は（16）が5.6cm、（17）が4.8cm、（8）が5.7cmを測る。色調は（16）が乳白色、（17・18）が灰白色である。胎土は（16）が石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む搬入品と考えられるが、（17・18）には石英・長石粒が多量に含まれており在地製と推定される。（19）は球形の体部から頸部が直上に伸びた後、口縁部が外反し外側に面をもつ広口壺である。口径15.6cmを測る。外面の調整はナデで、内面は体部上半に指ナデの痕跡が認められる。胎土には石英・長石粒が多量に含まれており、焼成は良好で灰白色の色調を呈している。

SK-13

7A地区で検出した。不定形を呈するもので、西部の一部がSP-16に切られている。規模は東西幅0.5m、南北幅1.56m、深さ0.14mを測る。埋土は褐灰色細粒砂の單一層である。遺物は弥生上器片が1点出土したが器種や時期は明確でない。

SK-14

7・8A地区で検出した。不定形を呈するもので、北部の一部がSP-30・SP-33に切られている。規模は東西幅0.9m、南北幅0.92m、深さ0.15mを測る。埋土は第1層褐灰色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が2点出土したが器種や時期は明確でない。

SK-15

8A・B地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、西部でSK-16を切っている。規模は南北幅0.4m、南北幅1.42m、深さ0.08mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層灰白色細粒砂・第3層灰白色シルト・第4層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代中期の上器片が極少量と、サヌカイトの剥片が1点出土している。甕1点（20）を図化した。甕の口縁部の小片で残存率は%程度である。全体に風化しており器壁面の調整は不明である。胎土に石英・長石・角閃石が含まれており、色調も褐灰色を呈することから生駒西麓製と推定される。

SK-16

7・8 A地区で検出した。東部がSK-15に切られている。規模は南北幅0.84m、南北幅1.46m、深さ0.03mを測る。埋土は灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-17

7・8 A地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅0.28m、南北幅0.88m、深さ0.13mを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-18

8・9 A地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.0m、南北幅1.1m、深さ0.31mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・

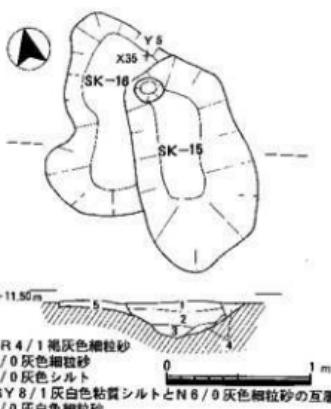
第2層灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量出土したが、器種や時期は明確でない。

SK-19

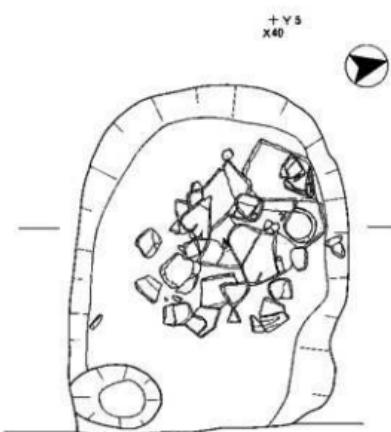
8・9 B地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅1.22m、南北幅0.96m、深さ0.08mを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の甕の1個体分が出土したが、全体に風化が顕著で細片化しており、復元することが出来なかつた。

SK-20

9 B地区で検出した。南北方向に長い椭円形を呈するもので、南北幅0.7m、南北幅1.26m、深さ0.08mを測る。埋土は第1層褐灰色細粒砂・第2層灰白色粘



第8図 SK-15・16平断面図



第9図 SK-19平断面図

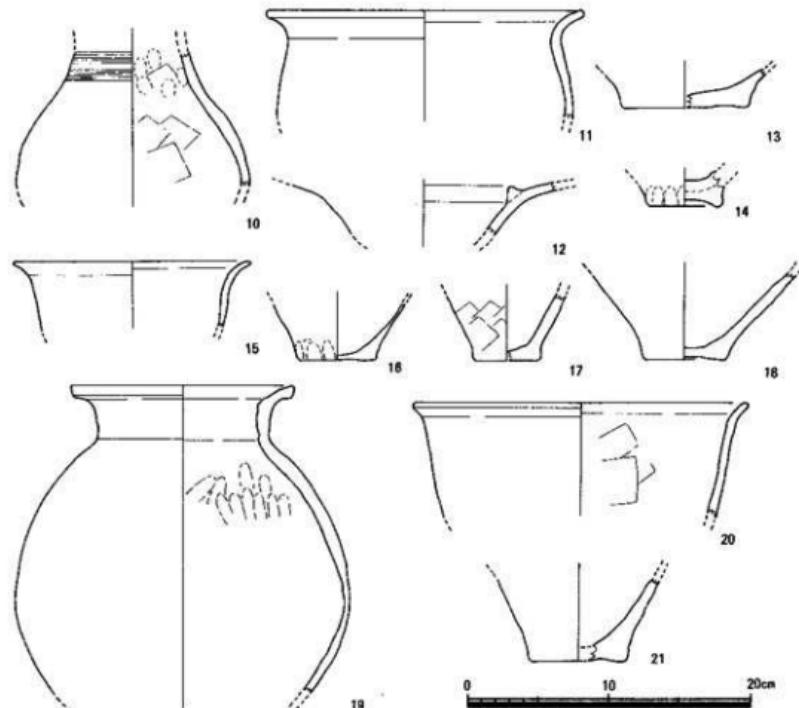
質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は出土しなかった。

SK-21

9A地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、北部の一部でSP-68に切られ、南部でSD-10を切っている。規模は東西幅0.9m、南北幅0.68m、深さ0.21mを測る。埋土は上層から第1層褐色灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-22

10B地区で検出した。東部および西部が調査区外に至るために全容は不明であるが、西部でSD-11を切っている。検出部分で東西幅1.2m、南北幅1.0m、深さ0.28mを測る。埋土は上層から第1層褐色灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色シルトである。遺物は赤生時代中期の甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が2点出土している。甕1点(21)を図化した。(21)は甕の底部で、残存率は1/4程度である。全体に器壁面の風化が顕著である。生駒西麓岸である。



第10図 SK-6 (10~12)、SK-8 (13+14)、SK-12 (15~19)、SK-15 (20)、SK-22 (21) 出土遺物実測図

溝(SD)

SD-1

1・2 A地区で検出した。南西-北方向に伸びるもので、検出長3.8m、幅0.5~1.0m、深さ0.18mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層黄橙色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が3点出土した。

SD-2

2 A・B地区で検出した。南東-北西方向に直線的に伸びるもので、北西端はSD-3に切られている。規模は検出長2.0m、幅0.18m、深さ0.08mを測る。埋土は褐灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期中頃(畿内第Ⅲ様式)の壺の小破片が極少量出土した。壺1点(22)を図化した。(22)は口縁端部が下外方に垂下する広口壺で、口縁端面に波状文が施文されている。灰白色の色調で、焼成は良好である。胎土には小砂粒が散見される程度の精良な粘土が使用されている。

SD-3

2・3 A・B地区で検出した。東側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では南北方向に伸びるもので、西側でSD-2を切っている。規模は検出長6.3m、幅0.62~1.24m、深さ0.3mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生時代前期(畿内第Ⅰ様式-新段階)の壺の小破片のほか、サヌカイトの剥片が3点出土している。壺3点(23~25)を図化した。(23)は底部で底径6.8cmを測る。内外面ともにナデ調整が行われている。胎土は粗く石英・長石・チャート粒が多量に含まれている。外面淡褐色、内面灰白色を呈する。(24)は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲するもので、口縁端部に刻目、頸部に2条のヘラ描による直線文を施文させている。胎土には石英・長石・チャート粒を多量に含むもので、色調は外面が淡褐色、内面が灰白色を呈する。形状から、前期の中でも新しい段階のものと考えられる。(25)は大型の壺で、頸部に7条を1単位とする櫛描直線文を施文している。器面調整は内外面ともにナデである。色調は淡褐色で、胎土には長石粒が散見される。

SD-4

2・3 A地区で検出した。北東-南西方向に伸びるもので、南西端はSK-6に切られている。規模は検出長3.34m、幅0.36m、深さ0.2mを測る。埋土は上層から第1層褐灰色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は第3層から弥生時代中期前半(畿内第Ⅱ様式)の壺等が出土した。壺1点(26)を図化した。(26)はやや小型の長頸の広口壺で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径16cm、器高27.5cm、体

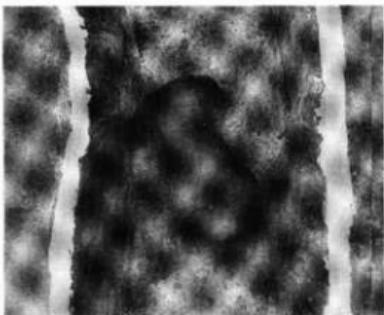


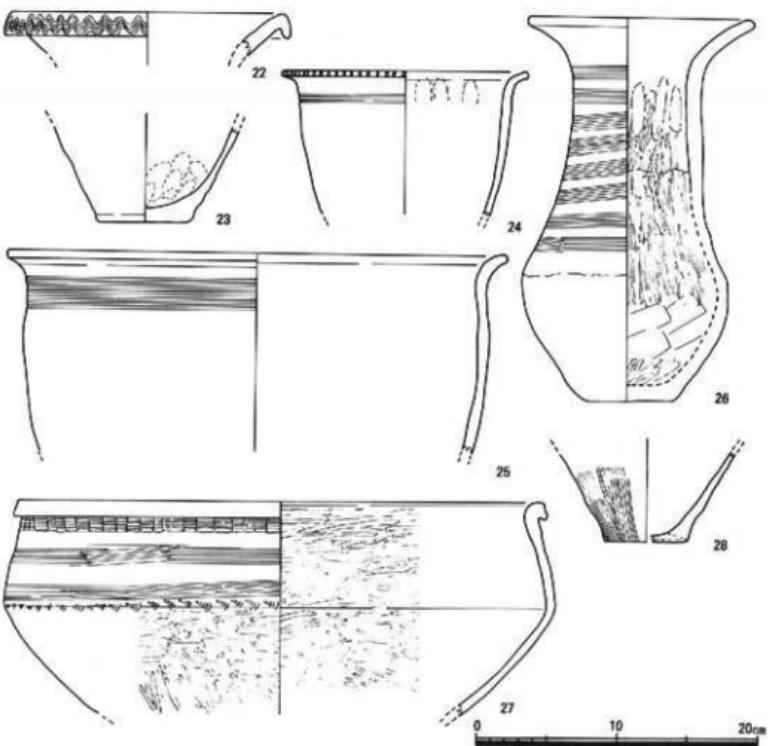
写真1 SD-4 广口壺 (26) 出土状況 (北から)

部最大径14.6cm、底径5.7cmを測る。頸部に1単位7本の櫛描直線文を8条巡らしている。器面調整は外面がナデ、内面は底部と口縁部がナデ、頸部が縦方向のミガキである。焼成は良好で色調は褐灰色を呈する。生駒西麓産である。

SD-5

4・5 A地区で検出した。南西方向に伸びるもので、北端は擾乱により切られている。

規模は検出長9.6m、幅0.38~1.06m、深さ



第11図 SD-2 (22)、SD-3 (23~25)、SD-4 (26)、SD-5 (27)、SD-9 (28)
出土遺物実測図

0.52mを測る。埋土は上層から第1層青灰色粘土・第2層褐色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層・第4層灰色細粒砂である。遺物は第4層から弥生時代中期中頃（畿内第Ⅲ様式）の壺・大型鉢の破片等が少量出土した。鉢1点（27）を図化した。（27）は大型の鉢で、復元口径37.4cmを測る。内湾気味に開く体部から屈曲して口縁部が内傾して立ち上がるもので、口縁端部は折り返しにより垂直方向に面をもつ。口縁部に上から櫛描縦状文1条、櫛描直線文2条、扇形文1条を施す。器面調整は、口縁部内面および体部内外面がヘラミガキである。色調は灰白色で、胎土には長石・石英・チャート粒が散見される。

SD-6

6・7B地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。規模は検出長1.1m、幅0.36m、深さ0.05mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の壺の小破片が極少量と、サヌカイトの剥片が8点出土した。

SD-7

8A地区で検出した。東西方向に伸びるもので、北西部でSK-17に切られ、西部は調査区外に至る。規模は検出長2.54m、幅0.7~1.16m、深さ0.14mを測る。埋土は第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD-8

9AB地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長5.22m、幅0.4~1.16m、深さ0.12mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は弥生上器片が少量と、サヌカイトの剥片が5点出土した。

SD-9

9AB地区で検出した。東西方向に弓状に伸びるもので、検出長5.64m、幅1.18~1.0m、深さ0.06mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の上器片が少量出土している。図化したものは壺1点（28）である。（28）は壺の底部で残存率は1/4程度である。外面に縱方向のハケ調整が行われている。色調は灰白色で、胎土には長石・チャート粒が多量に含まれている。搬入品と推定される。

SD-10

9・10A地区で検出した。北北東-南南西に伸びるもので、北端がSK-21に切られている。規模は検出長1.4m、幅0.5m、深さ0.08mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SD-11

10AB地区で検出した。3本の溝で構成されている。方向は北西-南東方向に伸びるもの2条と南北方向の1条である。南東端はSK-22に切られている。規模は検出長4.12m、幅0.18

～0.64m、深さ0.06mを測る。埋土は第1層褐色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が3点出土したが、器種や時期は明確でない。

SD-12

10A地区で検出した。南東～北西に伸びるもので、検出長0.9m、幅0.16m、深さ0.11mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は出土しなかった。

小穴(S P)

小穴は総数で78個〔S P-1～S P-78〕を検出した。上面の形状で区別すれば、円形、楕円形、方形、不定形の四種類が認められ、そのうち円形を呈するものが大半を占めた。規模は幅0.14～0.74m、深さ0.04～0.29mを測る。遺物はS P-17・

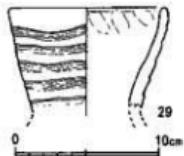
S P-39・S P-40・S P-45・S P-55・S P-66から土器 第12図 S P-55出土遺物実測図
類が出土したが、大半が小片で出土量も少なかった。

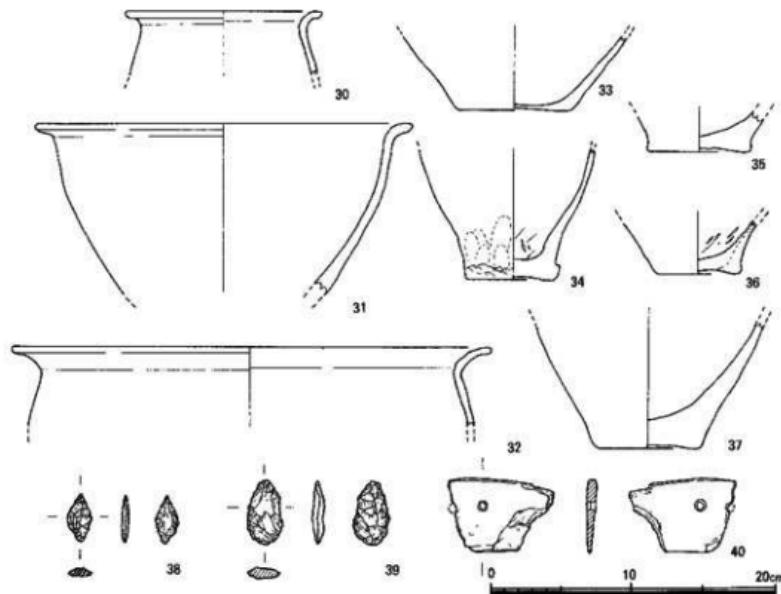
図化したものはS P-55出土の細頸壺(29)である。口縁部上半が内湾するもので口径11cmを測る。残存部分の外面には4本を1単位とする難な櫛描直線文が5条巡っている。小粒からやや大粒の長石・石英粒を多量に含む粗い胎土で、色調は灰白色を呈する。畿内第Ⅲ様式の古相に位置付けられる。

西トレント包含層(第4層)出土遺物

遺物は第4層から出土した。量的にはコンテナ箱に約半分程度である。種別では土器類と石器類がある。土器類については、小片化したものが多く、しかも器壁面の風化が進んだものが大半を占めている。時期的には、弥生時代中期前半～中頃(畿内第Ⅱ～Ⅲ様式)に比定される。図化したものは、土器類8点(30～37)、石器類3点(38～40)の計11点である。

土器類のなかで図化したものは壺の8点(30～37)である。(30～32)が口縁部、(33～37)が底部の資料である。口縁部の資料には、強く屈曲する(30・31)とゆるやかに外反する(32)がある。3点ともに器壁面が風化しており、調整は不明である。色調は3点ともに赤褐色系で、胎土には比較的大粒の長石・石英粒が多量に含まれている。底部の5点は胎土・色調からみて生駒西麓産のもの(33・35・36)と、胎土にチャートの含有が目立ち灰白色を呈する(34・37)に区別される。石器類には石鎚2点(38・39)と石庖丁1点(40)がある。石鎚(38)は凸基有茎式で長さ32.8mm、幅11.85mm、厚さ4.9mm、重量2.6mgを測る。(39)は未製品である。石材はともにサヌカイトである。石庖丁(40)は両端部が欠損しているが、おそらく直線刃半月形態のものと推定される。刃部は片刃である。肩部はわずかに外湾し、面取り状の研磨痕が認められる。紐孔は2孔であるが1孔は半掘している。石材は粘板岩である。





第13図 西トレンチ包含層（第4層）出土遺物実測図

2) 東トレンチ上層調査

土坑 (SK)

SK-23

4D地区で検出した。西部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.44m、南北幅0.44m、深さ0.21mを測る。埋土は第1層灰色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は石錐1点のほか、サヌカイトの剥片が2点出土した。石錐1点(45)を図化した。(45)は完形の棒状錐で長さ33.2mm、幅7.2mm、重さ1.3mgを測る。頭部から錐部にかけて細かい調整剥離で成形されている。石材はサヌカイトである。

SK-24

4D地区で検出した。北部が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で「L」字形を呈するもので東西幅1.06m、南北幅0.88m、深さ0.37mを測る。埋土は第1層褐色灰色細粒砂・第2層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が12点出土した。

SK-25

4D地区で検出した。南部が搅乱を受けており全容は不明である。検出部分で東西幅1.26m、南北幅0.74m、深さ0.36mを測る。なお、土坑内に存在する小穴から柱根が検出されている。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色中粒砂・第3層細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が2点出土した。

SK-26

8D地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.64m、南北幅1.54m、深さ0.09mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が9点出土した。要1点(41)を図化した。(41)は壺の口縁部で残存率が%程度の小片である。色調はにぶい黄橙色で、胎土には長石・石英が散見される。

SK-27

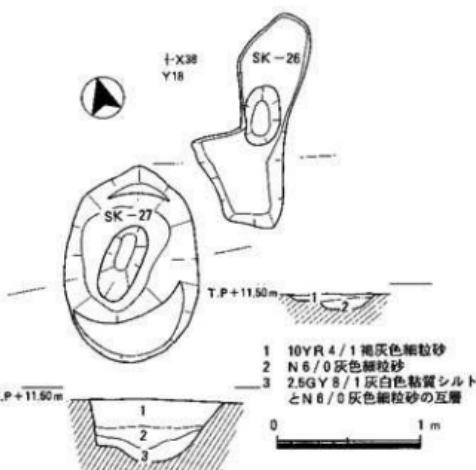
8・9D地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.94m、南北幅1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色粘質シルトと灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が2点出土した。

SK-28

9D地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.9m、南北幅1.56m、深さ0.35mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰色粘質シルトと灰色細粒砂の互層・第4層灰白色中粒砂である。遺物は弥生土器片が極少量と、サヌカイトの剥片が2点出土した。

SK-29

9D地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.66m、南北幅0.86m、深さ0.09mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は出土しなかった。



第14図 SK-26・27平面図

SK-30

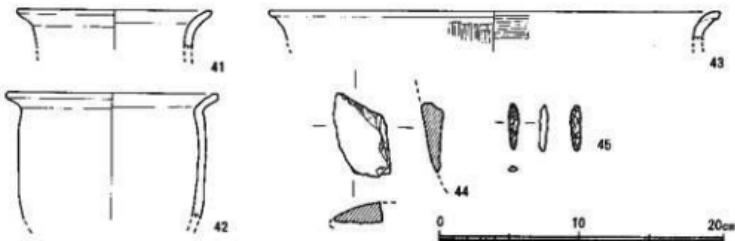
9D地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.76m、南北幅1.04m、深さ0.17mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂である。遺物は第2層から弥生時代中期の甕の小片が少量と、サヌカイトの剥片が1点出土した。甕1点(42)を図化した。(42)は口縁部が「く」の字に屈曲する甕である。内外面ともにナデ調整が行われている。色調は褐色で、胎土には石英・長石・角閃石が含まれている。

SK-31

10D地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.36m、南北幅0.82m、深さ0.11mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂である。遺物は弥生土器片が少量と、サヌカイトの剥片が5点出土した。甕1点(43)と石斧片1点(44)を図化した。(43)は大和型甕と呼称される甕の口縁部の資料で、残存率は $\frac{1}{2}$ 程度の小片である。体部外面に縱方向、口縁部内面に横方向のハケ調整が施されている。色調は褐色で、胎土には長石・石英粒が散見される。(44)は磨製石斧の一部と推定されるもので、丁寧に研磨された部分が残っている。石材は黒灰色の色調を呈するサヌカイトである。

SK-32

10D地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.74m、南北幅0.92m、深さ0.33mを測る。埋土は上層から第1層褐色細粒砂・第2層灰色細粒砂・第3層灰白色粘質シルトと灰色細粒砂の互層である。遺物は弥生土器片が少量と、サヌカイトの剥片が1点出土した。



第15図 SK-23(45)、SK-28(41)、SK-30(42)、SK-31(43・44)出土遺物実測図
溝(SD)

SD-13

8・9D地区で検出した。南北-北東方向に伸びるもので、検出長3.7m、幅1.0m、深さ0.17mを測る。埋土は褐色細粒砂である。遺物は弥生時代中期の土器片および石器類が少量出土

している。

6点(46~

51)を圓化

した。(46

~48)は壺

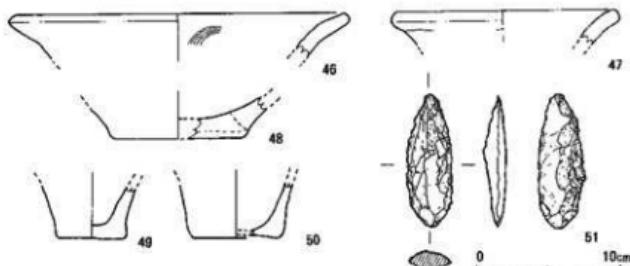
である。

(46・47)

は広口壺の

口縁部で

(46)の口



第16図 SD-13出土遺物実測図

縁部内面には櫛書きによる連弧文が施文されている。色調は(46)が淡灰色で、胎土には長石・石英・チャート粒が多量に含まれている。(47)は褐灰色の色調を特長とする生駒西麓産である。(48)は大型壺の底部である。(47)と同様生駒西麓産である。(49・50)は壺の底部で2点とも生駒西麓産である。(51)は石槍の未成品と考えられるもので、長さ9.4cm、幅3.3cm、重さ46.4mgを測る。背面側に自然面が残り、腹面側には人剥離面が残存している。腹面側の右側面中央の剥離を行った際に、剥離角度が深くなつた為、制作途中で廃棄された可能性が考えられる。石材はサヌカイトである。

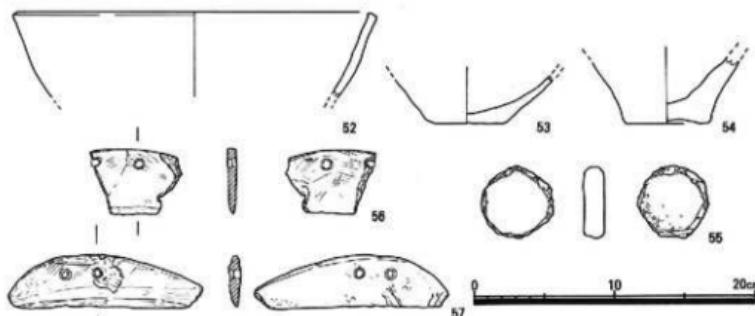
小穴(S P)

小穴は総数で10個(S P-79~88)検出した。上面の形状で区別すれば、円形・不定形がある。規模は幅0.14~0.82m、深さ0.07~0.36mを測る。遺物はS P-80・S P-81・S P-83・S P-87・S P-88から弥生時代中期の土器片・サヌカイトの剥片が出土したが、いずれも小片で出土量も少ない。

・東トレンチ包含層出土遺物

第4層から出土したが、調査区の約1/2程度が現在の搅乱を受けていたため、出土量もコンテナ箱にして1/4程度と少ない。6点(52~57)を圓化した。(52)は鉢で口径25.8cmを測る。内外面ともに器壁面の風化が著しく、調整は不明瞭である。胎土には長石・石英・黒雲母が含まれている。色調は赤褐色である。(53・54)は壺の底部である。ともに生駒西麓産である。(55)は土器片を再加工した円板状土製品である。不整円形を呈するもので、幅5cm、厚さ1.4cmを測る。石器類は石庖丁2点(56・57)を圓化した。(56)片刃の石庖丁で両端部が欠損している。刃部は直線状を呈するが刃先は潰れている。紐孔は2孔であるが1孔は半掘している。石材は緑泥片岩である。(57)は両端部を欠損するが、ほぼ全容を知り得るものである。形態的には、内湾刃半月形態に分類されるもので、刃部は片刃である。現存部分で長さ13.5cm、

幅3.4cm、厚さ0.8cm、紐孔間距離1.6cm、重さ54.7mgを測る。背部および刃部に剥離が認められるほか、両面の片側端部付近に敲打痕が認められる。紐孔は2孔である。石材は緑泥片岩である。



第17図 東トレンチ包含層（第4層）出土遺物実測図

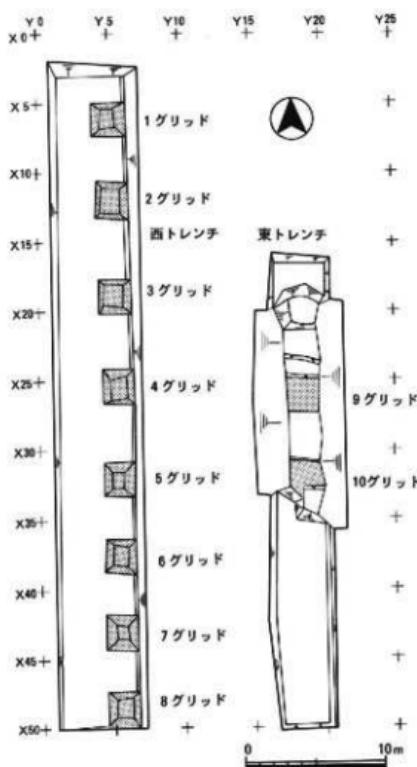
3) 下層調査

上層調査の終了後、西トレンチでは、基礎杭構築部分に $2.5 \times 2.5\text{m}$ 規模のグリッド8箇所（北から第1グリッド～第8グリッド）を設定した。東トレンチでは、X17地点からX35地点にかけて大規模な搅乱が検出されたことから、搅乱が第14層下部におよんでいない部分に $2.3 \times 2.4\text{m}$ 規模の第9グリッド（X25～X27.5地点）、さらにその南側に $2.4 \times 2.0\text{m}$ 規模の第10グリッド（X31～X32）を設定した。西トレンチに設定したグリッドでは、第5層から第12層については、縄文時代全般の遺構・遺物の有無を確認することに主眼を置き、人力により層理ごとに掘削する調査方法を取った。第12層から第14層下部については、旧石器時代相当層に当たるため旧石器の検出と埋没古地形の復元を目的として、ひねり鎌（手ガリ）と手スコを併用し、 0.5m 前後にわたる範囲を調査対象とした。東トレンチに設定したグリッドについては、搅乱が及んでいない第12層～第14層下部を調査対象とした。以上のような調査方法をとり丁寧な調査に努めたが、遺物は土器類および石器類は1点も出土しなかった。



写真2 第9グリッド調査風景（南から）

一方、火山灰分析においては、絶対的な含有量が少なく降灰層準を決定することは困難であるとされつつも、相対的な火山ガラスの含有率のピークと各火山灰の降灰順序を考慮して、第12層～第13層 b 上部で始良-Tn 火山灰 (AT)、第12層で鬼界ーアカホヤ火山灰 (K-Ah)、第9層 a～第9層 c で曾根沼火山灰の3種類の火山灰ガラスが確認されている。ただ、鬼界ーアカホヤ火山灰 (K-Ah) を起源とする火山ガラスについては、火山噴出物の年代幅が大きい下位層準の始良-Tn 火山灰 (AT) と混在して検出される等の特徴が認められた。なお、当調査地の火山灰分析試料採取地点から北西約420m の八尾南遺跡第8次調査 (YS87-8) で実施した火山灰分析においても、同様の成果が得られており、約1.5万年の年代差をもつ火山ガラスが同一層中に混在して出土する堆積環境の変化を各分野との相互研究の中で、明確にする必要がある。



第18図 下層調査グリッド設定図

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代前期（畿内第I様式新段階）から弥生時代中期（畿内第II・III様式）に比定される遺構・遺物を検出した。

弥生時代前期新段階に比定される遺構としては、西トレンチで検出したSD-3 があるのみで、不明な点が多い。また、遺物包含層である4層からも、当該期に比定される遺物が数点出土したことから、この期に集落の存在が認められるものの、当調査地付近は居住域

の中心的な位置からは離れた地点にあったようである。既往調査では、当調査地から北西250m地点で実施された第5次調査(YS86-5)で、前期古段階～新段階の掘立柱建物群・壇^{註1}1基・しがらみ1箇所が検出されているほか、さらに南側に接する位置で実施された第15次調査(YS90-15)では、前期古段階～中段階の土器類が多量に出土した自然河川が検出されており、これらの調査地の近隣において、当該期の集落が存在したものと推定されている。

弥生時代中期(畿内第II・III様式)の遺構については、当調査地の北西270mで実施された大阪市の長原遺跡第41次調査(NG82-41)で、中期中頃の水田が検出されている以外は不明^{註3}であった。今回の調査では集落の中核を成す居住域に関連した遺構群が検出されており、長原遺跡第41次調査(NG82-41)で検出された水田もこれらの集落の生産遺構であった可能性が高い。

注

- 註1 駒沢 敦 1988「7 八尾南遺跡(第5次調査)」「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」
■八尾市文化財調査研究会報告16 ■八尾市文化財調査研究会
- 註2 青木勘時 1990「6 八尾南遺跡(YS89-15)」「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」
■八尾市文化財調査研究会報告28 ■八尾市文化財調査研究会
- 註3 大阪市教育委員会・■大阪市文化財協会 1983『入阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査の現地説明会資料』

付章 八尾南遺跡第17次調査の火山灰分析

株式会社京都フィッショングループ

檀原 徹

1. 試 料

今回の分析試料は、八尾南遺跡第17次調査に伴い財團法人八尾市文化財調査研究会の発掘担当者の手により採取された柱状土層試料（巻末写真参照）である。この試料は、土層区分および層厚を考慮して同担当者の指示により室内でさらにサンプリングされ以下の分析に供された。なお試料の採取層準は、測定データを総合的にまとめた図1（P173・174）の図中に示されている。

2. 分析方法

試料の分析は、以下のフローチャートに従い行った。

次に処理工程について説明を加える。

(1) 色調判定

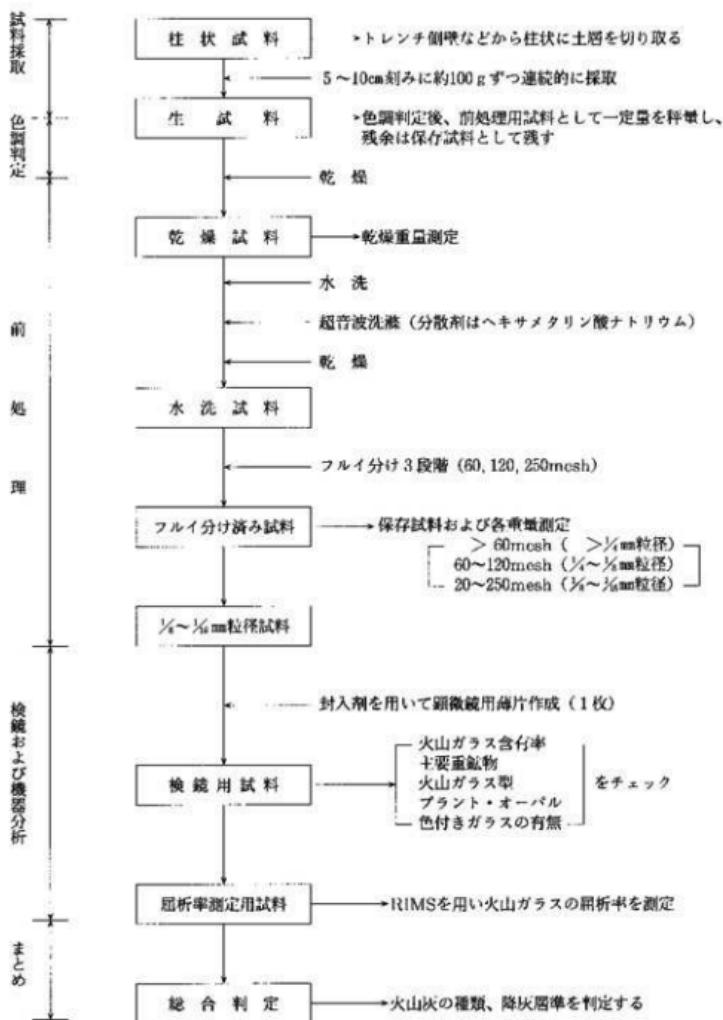
未処理試料50～100 gを白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修、1970）により判定表示する。

(2) 前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0 g秤量し、50°Cで15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2 Lビーカーで数回水替えしながら水洗し、超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60, 120, 250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250 mesh（ $\frac{1}{16} \sim \frac{1}{32}$ mm）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd = 1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

(3) 重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・单斜輝石・角閃石・黒雲母・アバタイト・ジルコン・イディングサイト等）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝聚することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成



土壤中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理順序表

分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。なお重鉱物分析は横山・楠木（1969）※(2)および吉川（1976）※(3)に準拠した。

(4) 火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

②火山ガラス型

吉川（1976）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付ガラスの有無

淡褐色～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア（塙基性火山碎屑物）中にしばしば含まれる赤褐色、黄、黄緑色のガラスは含まれない。

(5) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により割裂・保存された120～250mesh ($\frac{1}{8} \sim \frac{1}{16}$ mm) 粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS 86）※(4)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データは表末にデータシートとしてまとめられ、次に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。Ndの式はその浸液温度から屈折率を換算するもの、Ndは屈折率、tは温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので、この式から火山ガラスの屈折率が計算される。

$(As.+De.) / 2$ は合致温度を上昇させた時（Ascent）と下降（Descent）の平均値として求めた時の意味であるが、繁雑さを避けるため測定温度は表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的に Total の項にまとめられる。

count, min, max, range, mean, st, dev, skew はそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、

最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率の histogram の図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。

*一つが1個の火山ガラスである。

3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の図1に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壤中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壤中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でもその組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粹にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中には少なくとも3種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに近畿地方でのテフラ・カタログ（表1）や今回の分析結果（表2）と対照すると、降灰年代の古いものから始良-Tn 火山灰 AT (BB55), 鬼界-アカホヤ火山灰K-Ah (B5-3 (U)), 曽根沼火山灰 (BB7) 奈(5)(6)に対比するのが自然である。ただし3火山灰とも絶対的な含有率は低く、いずれも降灰層準を決定することは困難である。しかし相対的な含有率のピークと各火山灰の降灰順序を考慮すると、およその降灰層準の認定は不可能ではないと判断される。

次にこれらの対比にまとづき、今回の分析結果とその解釈を一覧表で示す（表2）。

- ※(1) 町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治 (1983) : 南関東の火山灰層中の変質鉱物 "イディングサイト" について、第四紀研究, 22(1), 69-76.
- ※(2) 横山卓雄・榎木幹浩 (1969) : 鍵層としての火山灰層、特に大阪層群の火山灰について、同志社大学理工研報告, 9, 58-93.
- ※(3) 吉川周作 (1976) : 大阪層群の火山灰層について、地質学雑誌, 82(8), 479-515.
- ※(4) 横山卓雄・植原 徹・山下 通 (1986) : 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定、第四紀研究, 25(1), 21-30.
- ※(5) 竹村恵二・植原 敏 (1988) : 土壤中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年-温度変化型屈折率測定装置を使用して-

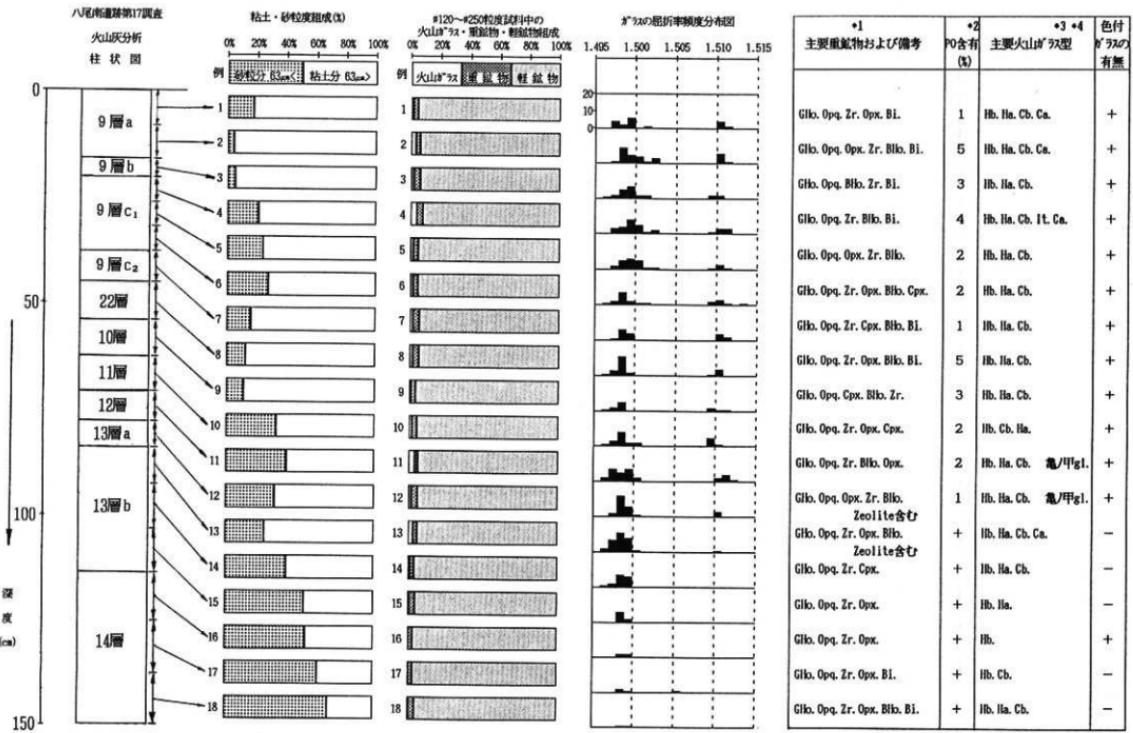


図1. 八尾南遠跡第17次調査(YS90-17)

西トレンチ第4グリッド雨蓋柱状試料 (148cm)

試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

- *1 主要鉱物組成と鉱物名
Opx: オペル・Cpx: 角閃石 Opx: 錐閃石 Cpx: 単斜輝石 Gho: 緑色普通角閃石 Bh: 暗色普通角閃石
Bk: 黒雲石 Gar: ガラス石 Zr: ジルコン Id: イディングサイト Opg: 不透明物
- *2 PO: ブラント・オペル合有率 or 有無
- *3 主要ガラス型の名前(吉川, 1976)
- *4 (古川, 1976) 以外のガラス型の略称
SG: スコリア質ガラス It: 不規則型

考古学と自然科学 第20号 日本文化財学会誌 35-50.

※(6) 町田 洋・新井房夫・小田静夫・達藤邦彦・杉原重雄(1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—、古文化財の自然科学的研究 869-928.

表1. 各道跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ボーリングの火口灰、広域チフラの特性との比較 (竹村・権原, 1988年)
 Table 1. Comparison among characteristics of volcanic glasses included in columnar samples at archaeological sites and those of volcanic ashes in Lake Biwa drilling samples and widespread tephra.

比較試料 項目	チフラ名・試料名	岩石と軽物組成	¹⁴ C年代 (BP)	火山ガラスの色と形	火山ガラスの屈折率レンジ(モード) 文献
鳥 浜	No6	——	——	T, C Ha, Hb (br)	1.499-1.503 (1.501-1.503) 1.510-1.512 1.521-1.524 (1.521-1.523)
	No22	——	——	T, C	* 1 * 1 * 1
	No49	軽石質・af, Ho, Bi	——	——	——
	56-54, 51, 50, 48-27	——	——	Ila, Hb	1.497-1.501 (1.498-1.500) * 1
板 井	P11	——	——	——	——
	No18	——	——	——	——
	P11 No10	結晶質・Ho, Opx ガラス質	19,600-20,400 21,500-23,600	T Ha, Hb>C, T	1.501-1.504 (1.502-1.504) 1.499-1.502 (1.500-1.502) * 2 * 2
	——	——	——	——	——
京 大 横 内	No1	——	——	——	——
	——	——	——	Ha, Hb (br)	1.508-1.512 (1.509-1.511) * 1
	——	——	——	——	——
	No3, 4, 8, 9, total	——	——	Ha	1.498-1.501 * 1
琵 琶 湖	BB 7	——	——	C, T A (br)	1.499-1.504 1.509-1.513 (1.509-1.512)
	P 5-3 (U)	ガラス質・Opx, Cpx 軽石質	——	B, C	1.520-1.524 (1.520-1.524) * 4, 5
	BB 23	——	——	C	1.501-1.506 1.499-1.502 (1.500-1.501) * 4, 5
	BB 51	結晶質・Ilo, Opx ガラス質・Opx, Cpx, Ho	——	A>B	1.517-1.524 * 4, 5
広 域 チ フ ラ	BB 55	——	——	——	——
	K-Ah じ-Oki 大山ホーキ AT	ガラス質・Opx, Cpx 軽石質・af, Bi, Ho 結晶質・Ho, Opx, Bi ガラス質・Opx, Cpx, Ilc	6,300 9,300 20,000 (24,720)	bw>pm (br) pm bw>pm bw>pm	1.508-1.514 (1.501) 1.517-1.524 1.498-1.501 (1.500) * 6 * 7 * 8 * 9 * 10

af: アルカリ長石, Opx: 斜方輝石, Ho: 鋸閃石, Bi: 雷閃石, Hb: ブルマイト + ルース, pm: 鋼石質, br: 色付ガラス。
 * 1: 竹村・権原 (1988). * 2: 竹村・権原 (1987). * 3: YOSHIKAWA (1981). * 4: 桐山 (1973). * 5: 棚山 (1976).
 * 6: 町田・斎井 (1978). * 7: 斎井ほか (1981). * 8: 町田・斎井 (1979). * 9: 町田・斎井 (1976). * 10: 松本ほか (1987).

表2. 八尾南遺跡第17次調査火山ガラス漫集層準とその特徴

火山ガラス検出層準				分布層準	最大深度	地層名	屈折率	(Nd)	対比される層	層厚	参考
サンプル名	深度	サンプル名	深度								
No.1 ~ No.6	0 cm ~ 38cm	—	—	9層a ~ 9層c	1,499 ~ 1,563	C型 (中間型)	[二葉山 o r 大山系] 曾根沼火山灰 BB 7	3,000 B.P.	No.1 ~ 6 試料で少量検出されたのみであり、降灰層準決定は困難。降灰層準に近いという状況面を与えるに止まるが、火山ガラスの特徴と層序から曾根沼火山灰の可能性がある。		
No.1 ~ No.13	0 cm ~ 96cm	No.11	75cm ~ 84cm	1,508 ~ 1,514 最深値 = 1,510	H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah) B5-3 (C)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス (AT) と混在するがNo.1試料層準で相応な含有量が多く、降灰層準に近いと判断される。ガラス形態は日燃を主とし褐色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率が低いのが特徴。最深層準上位でアント・オバール含有量が多くなる。			
No.1 ~ No.18	0 cm ~ 148cm	No.1 ~ No.13	75cm ~ 96cm	1,498 ~ 1,501 最深値 = 1,500	H型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT) B355	21,000 ~ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出される。No.11~13試料で相対的に濃集するが、含有量が少なく降灰層準と断言することは困難。降灰層準に近いとのみ言いうる。無色透明な扁平 (ハブル・ワール) 型ガラスを主とし丸ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。			

※5)竹村恵二・鶴原 篤(1988)：土壤中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層別および縦年-密度化分析本測定装置を使用して-、考古学と自然科学 第20号 日本国文化財科学会誌、35-50。

(6)前田 洋ほか(1994)：チフタと日本考古学－考古学研究と関係するチフタのカタログ－、古文化財の自然科学的研究、865-928。

No.	試料名	重鉱物組成率(1)										備考	
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap		
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	八尾南遺跡 9層a 上 0~8 cm	0	3	0	0	124	36	0	4	3	0	170	
		0.0	1.8	0.0	0.0	72.8	21.2	0.0	2.4	1.8	0.0	100.0	
2	八尾南遺跡 9層a 下 8~16 cm	0	1	0	1	156	36	0	1	5	0	210	
		0.0	0.5	0.0	0.5	78.0	18.0	0.0	0.5	2.5	0.0	100.0	
3	八尾南遺跡 9層b 16~20 cm	0	0	0	3	174	15	0	2	6	0	200	
		0.0	0.0	0.0	1.5	87.0	7.5	0.0	1.0	3.0	0.0	100.0	
4	八尾南遺跡 9層c 上 20~26 cm	0	0	0	1	151	42	0	4	2	0	200	
		0.0	0.0	0.0	0.5	75.5	21.0	0.0	2.0	1.0	0.0	100.0	
5	八尾南遺跡 9層c 中 26~32 cm	0	3	0	1	139	26	0	3	0	0	172	
		0.0	1.7	0.0	0.6	80.9	15.1	0.0	1.7	0.0	0.0	100.0	
6	八尾南遺跡 9層c 下 32~38 cm	0	2	1	2	160	22	0	3	0	0	190	
		0.0	1.1	0.5	1.1	84.1	11.6	0.0	1.6	0.0	0.0	100.0	
7	八尾南遺跡 9層c 38~46 cm	0	0	1	1	134	17	0	2	3	0	158	
		0.0	0.0	0.6	0.6	84.8	10.8	0.0	1.3	1.9	0.0	100.0	
8	八尾南遺跡 22層 46~55 cm	0	1	0	1	166	28	0	2	2	0	200	
		0.0	0.5	0.0	0.5	83.0	14.0	0.0	1.0	1.0	0.0	100.0	
9	八尾南遺跡 10層 55~64 cm	0	0	2	2	164	31	0	1	0	0	200	
		0.0	0.0	1.0	1.0	82.0	15.5	0.0	0.5	0.0	0.0	100.0	
10	八尾南遺跡 11層 64~75 cm	0	3	1	0	128	42	0	6	0	0	180	
		0.0	1.7	0.6	0.0	71.1	23.3	0.0	3.3	0.0	0.0	100.0	

注.率(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は、以下のように対応します。

Ol : カンラン石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, BHo : 褐色普通角閃石,

Gho : 緑色普通角閃石, Opq : 不透明(鉄)鉱物, Id : イディングサイト, Zr : ジルコン,

Bi : 黒雲母, Ap : アバタイト, Gar : ザクロ石, VG : 火山ガラス,

No.	試料名	重鉱物組成率(1)									備考			
		OI	Pyroxene			Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	Total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo								
11	八尾南遺跡 12層 75~82 cm	0	2	0	4	158	15	0	6	0	0	185		
		0.0	1.1	0.0	2.2	85.4	8.1	0.0	3.2	0.0	0.0	100.0		
12	八尾南遺跡 13層a 82~88 cm	0	4	0	2	160	31	0	3	0	0	200	zeolite? 含む	
		0.0	2.0	0.0	1.0	80.0	15.5	0.0	1.5	0.0	0.0	100.0		
13	八尾南遺跡 13層b 上 88~96 cm	0	2	0	2	152	36	0	8	0	0	200	zeolite? 少量含む	
		0.0	1.0	0.0	1.0	76.0	18.0	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0		
14	八尾南遺跡 13層b 中 96~105 cm	0	0	2	0	149	41	0	8	0	0	200		
		0.0	0.0	1.0	0.0	74.5	20.5	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0		
15	八尾南遺跡 13層b 下 105~115cm	0	2	0	0	105	40	0	5	0	0	152		
		0.0	1.3	0.0	0.0	69.1	26.3	0.0	3.3	0.0	0.0	100.0		
16	八尾南遺跡 14層 上 115~125cm	0	1	0	0	142	40	0	8	0	0	191		
		0.0	0.5	0.0	0.0	74.4	20.9	0.0	4.2	0.0	0.0	100.0		
17	八尾南遺跡 14層 中 125~135cm	0	1	0	0	100	25	0	5	3	0	134		
		0.0	0.7	0.0	0.0	74.7	18.7	0.0	3.7	2.2	0.0	100.0		
18	八尾南遺跡 14層 下 135~148cm	0	2	0	1	95	50	0	7	5	0	160		
		0.0	1.3	0.0	0.6	59.3	31.3	0.0	4.4	3.1	0.0	100.0		
	以下余白													

注. 標(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は、以下のように対応します。

OI : カンラン石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, BHo : 極褐色普通角閃石,

Gho : 緑色普通角閃石, Opq : 不透明(鐵)鉱物, Id : イディングサイト, Zr : ジルコン,

Bi : 黒雲母, Ap : アパタイト, Gar : ザクロ石, VG : 火山ガラス,

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	八尾南遺跡 9層a 上 0~8 cm	1.4973 (1.5013) 1.5100	1.4997 (1.5013) 1.5114	1.4985 1.5013 1.5107	12 1 5	1.499≤Nd<1.500	H型主C型
2	八尾南遺跡 9層a 下 8~16 cm	1.4979 (1.5010) 1.5017	1.5009 (1.5014) 1.5023	1.4991 1.5021 1.5106	19 4 1	1.498≤Nd<1.499	H型主C型
3	八尾南遺跡 9層b 16~20 cm	1.4964 1.5008 1.5096	1.5002 1.5017 1.5107	1.4988 1.5013 1.5101	16 3 4	1.499≤Nd<1.500	H型主C型
4	八尾南遺跡 9層c, 上 20~26 cm	1.4972 1.5023 1.5097	1.5012 1.5025 1.5113	1.4993 1.5024 1.5106	21 2 7	1.499≤Nd<1.500	H型主C型
5	八尾南遺跡 9層c, 中 26~32 cm	1.4975 1.5016 1.5093	1.5004 1.5024 1.5112	1.4992 1.5020 1.5104	18 2 5	1.499≤Nd<1.500	H型主C型
6	八尾南遺跡 9層c, 下 32~38 cm	1.4965 (1.5015) 1.5094	1.5000 (1.5015) 1.5136	1.4984 1.5015 1.5107	13 1 7	1.498≤Nd<1.499	H型主C型
7	八尾南遺跡 9層c, 38~46 cm	1.4978 1.5104	1.4993 1.5114	1.4987 1.5109	11 6	1.498≤Nd<1.499	H型主C型
8	八尾南遺跡 22層 46~55 cm	1.4968 1.5098	1.4997 1.5104	1.4984 1.5102	17 5	1.498≤Nd<1.499	H型主C型
9	八尾南遺跡 10層 55~64 cm	1.4969 1.5099	1.4989 1.5112	1.4980 1.5104	8 4	1.498≤Nd<1.499	H型主C型
10	八尾南遺跡 11層 64~75 cm	1.4969 1.5101	1.5002 1.5113	1.4985 1.5107	16 6	1.498≤Nd<1.499	H型主C型

※ H : 簡單型
C : 中間型
T : 多孔質型
(吉川, 1976)

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
11	八尾南遺跡 12層 75~82 cm	1.4967	1.5005	1.4985	23	1.497 ≤ Nd < 1.498	
12	八尾南遺跡 13層 a 82~88 cm	1.4971	1.5003	1.4988	21	1.499 ≤ Nd < 1.500	H型主C型
13	八尾南遺跡 13層 b 上 88~96 cm	1.4962	1.5002	1.4984	29	—	
14	八尾南遺跡 13層 b 中 96~105 cm	1.4969	1.4998	1.4987	16	1.498 ≤ Nd < 1.499	H型主C型
15	八尾南遺跡 13層 b 下 105~115 cm	1.4980	1.4997	1.4988	8	1.498 ≤ Nd < 1.499	H型
16	八尾南遺跡 14層 上 115~125 cm	1.4981	1.4995	1.4988	4	— ≤ Nd < —	H型
17	八尾南遺跡 14層 中 125~135 cm	1.4986	1.4990	1.4988	3	— ≤ Nd < —	H型 C型
18	八尾南遺跡 14層 下 135~148 cm	1.4981	1.4990	1.4986	2	— ≤ Nd < —	H型 C型
以下余白							

※ H : 扁平型
 C : 中間型
 T : 多孔質型
 (吉川, 1976)

第1表 八尾南遺跡第17次調査火山灰分析

通 番 No	試料名	乾燥 重量 (g)	粒度組成(g)			組物・ガラス組成(%)			主要重鉱物および参考 物	PO 含有 量(%)	*1	*2	*3	*4	色付 ガラス 有無
			砂粒分(mesh size)	粘土分	火山灰	重鉱物	ガラス	物			主	合	主	要	
1	9層a上	21.4	2.1	0.8	0.8	17.7	1.5	3.0	95.0	GHo, Opx, Zr, Opz, Bi.	1	Hb, Ha, Cb, Ca.	+		
2	9層a下	20.8	0.2	0.1	0.5	20.0	3.0	3.0	94.0	GHo, Opx, Opx, Zr, Bi, Bi.	5	Hb, Ha, Cb, Ca.	+		
3	9層b	21.5	0.1	0.2	0.8	20.4	2.0	4.0	94.0	GHo, Opx, BHo, Zr, Bi.	3	Hb, Ha, Cb.	+		
4	9層c上	22.5	1.2	0.8	2.7	17.8	4.0	4.0	92.0	GHo, Opx, Zr, BHo, Bi.	4	Hb, Ha, Cb, It, Ca.	+		
5	9層c中	23.5	1.9	0.9	2.8	17.9	2.0	3.0	95.0	GHo, Opx, Opx, Zr, BHo.	2	Hb, Ha, Cb.	-		
6	9層c下	24.1	3.2	0.8	2.6	17.5	2.0	3.0	95.0	GHo, Opx, Zr, Opx, Hb, Cpx.	2	Hb, Ha, Cb.	+		
7	9層c	23.8	1.3	0.5	2.0	20.0	2.0	4.0	94.0	GHo, Opx, Zr, Cpx, BHo, Bi.	1	Hb, Ha, Ch.	+		
8	22層	23.4	0.5	0.6	1.9	20.4	2.0	4.0	94.0	GHo, Opx, Zr, Opx, BHo, Bi.	5	Hb, Ha, Cb.	+		
9	10層	23.1	0.5	0.6	1.6	20.4	1.0	3.0	96.0	GHo, Opx, Cpx, BHo, Zr.	3	Hb, Ha, Cb.	!		
10	11層	24.2	1.8	2.1	4.2	16.1	2.0	3.0	95.0	GHo, Opx, Zr, Opx, Cpx.	2	Hb, Ha, Cb.	+		

*1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

O1: カンラン石 Opx: 鋸方輝石 Cpx: 喬羽輝石 CHo: 緑色普通角閃石 BHo: 黑色普通角閃石
 Bi: 黒雲母 Gar: デクロ石 Zr: ジルコン Id: イディングサイト Opx: 不透明鉱物

*2 PO含有とはプラント・オパールの含有量(%)を示します。

*3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します。

Hb, Ha: 平型(バブル・ウォール型) Ca, Cb: 中間型(堅石型) Ta, Tb: 多孔質型(堅石型) 織維状型

*4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

Sg: スコリア質ガラス Ir: 不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
試料名	9層a	9層a	9層b	9層c	9層c	9層c	9層c	22層	10層	11層	12	13	14	15	16
1.495=<Nd<1.496	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.496=<Nd<1.497	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1
1.497=<Nd<1.498	4	1	2	3	2	2	1	3	2	3	2	3	2	3	3
1.498=<Nd<1.499	2	9	5	4	5	7	6	11	5	8	5	8	5	8	8
1.499=<Nd<1.500	6	5	7	8	6	2	4	2	0	0	2	0	2	0	2
1.500=<Nd<1.501	0	4	2	5	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
1.501=<Nd<1.502	1	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.502=<Nd<1.503	0	3	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.503=<Nd<1.504	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.504=<Nd<1.505	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.505=<Nd<1.506	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.506=<Nd<1.507	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.507=<Nd<1.508	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.508=<Nd<1.509	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.509=<Nd<1.510	0	0	2	1	1	2	0	1	2	1	2	1	2	5	5
1.510=<Nd<1.511	4	6	2	3	3	3	4	4	4	1	1	1	1	1	1
1.511=<Nd<1.512	1	1	0	3	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0
1.512=<Nd<1.513	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.513=<Nd<1.514	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1.514=<Nd<1.515	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第2表 八尾南遺跡第17次調査火山灰分析

通番 No.	試料名	粒度組成(g)				鉱物・ガラス組成(%)	*1 主要重鉱物および備考	PO *2 含有 量(%)	*3 主要火山ガラス型	色付 ガラス 有無
		乾燥 重量 (g)	砂粒分(mesh size) >60 ~ 120 ~ 250	粉々分 <250	火山 重鉱 軽鉱 物					
11	12層	25.1	1.9	2.6	5.8	14.8	GHo. Opx. Zr. BHo. Opx.	2	Hb. Ha. Cb. 鬼/明gl.	+
12	13層 a	24.9	1.2	1.9	5.1	16.7	GHo. Opx. Opx. Zr. BHo.	*	Hb. Ha. Cb. 鬼/明gl.	+
13	13層 b 上	24.3	0.6	1.3	4.5	17.9	GHo. Opx. Zr. Opx. BHo.	*	Hb. Ha. Cb. Ca.	-
14	13層 b 中	25.2	0.5	1.8	8.1	14.8	GHo. Opx. Zr. Cpx.	+	Hb. Ha. Cb.	-
15	13層 b 下	25.2	0.8	3.0	9.6	11.8	GHo. Opx. Zr. Opx.	+	Hb. Hb.	-
16	14層上	25.3	2.1	3.7	7.9	11.6	GHo. Opx. Zr. Opx.	+	Hb.	+
17	14層中	25.3	2.9	5.0	7.9	9.5	GHo. Opx. Zr. Opx. Bi.	+	Hb. Cb.	-
18	14層下	25.5	4.7	6.9	6.1	7.8	GHo. Opx. Zr. Opx. BHo. Bi.	+	Hb. Ha. Cb.	-

* Zeolite含む

* 1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

O1:カンラン石 Opx:斜方輝石 Cpx:單斜輝石 GHo:緑色普通角閃石 BHo:褐色普通角閃石
 BI:黒雲母 Gar:ガロ石 Zr:ジルコン Id:イディングサイト Opx:不透明鉱物

* 2 PO含有とはブレント・オパールの含有量(%)を示します。

* 3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します。

Hb, Hb:扁平型(バブル・ウォール型) Ca, Cb:中間型(軸石型) Ta, Tb:多孔質型(軸石型、繊維状型)

* 4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

Sg:スコリア質ガラス It:不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.) 試料名	11	12	13	14	15	16	17	18	12層 13層 a 13層 b 13層 b 13層 b 14層 14層 14層
	12層	13層 a	13層 b	13層 b	13層 b	14層	14層	14層	
1.495=<Nd<1.496	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.496=<Nd<1.497	2	0	2	1	0	0	0	0	0
1.497=<Nd<1.498	7	2	7	2	0	0	0	0	0
1.498=<Nd<1.499	5	12	11	7	6	2	2	1	1
1.499=<Nd<1.500	7	6	8	6	2	2	1	1	1
1.500=<Nd<1.501	2	1	1	0	0	0	0	0	0
1.501=<Nd<1.502	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.502=<Nd<1.503	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.503=<Nd<1.504	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.504=<Nd<1.505	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.505=<Nd<1.506	0	0	0	0	0	0	1	0	0
1.506=<Nd<1.507	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.507=<Nd<1.508	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.508=<Nd<1.509	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.509=<Nd<1.510	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.510=<Nd<1.511	2	3	1	0	0	0	0	0	0
1.511=<Nd<1.512	4	0	0	0	0	0	0	0	0
1.512=<Nd<1.513	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1.513=<Nd<1.514	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.514=<Nd<1.515	0	0	0	0	0	0	0	0	0

写 真 図 版 の 凡 例

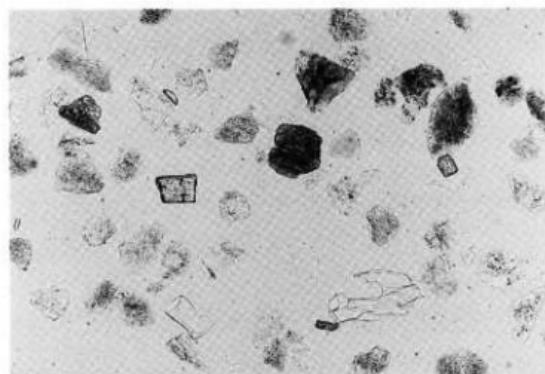
重 航 物

OI : カンラン石	Id : イディングサイト
Opx : 斜方輝石	Zr : ジルコン
Cpx : 単斜輝石	Bi : 黒雲母
GHo : 緑色普通角閃石	Ap : アバタイト
BHo : 褐色普通角閃石	Gar : ザクロ石
Opq : 不透明鉱物	

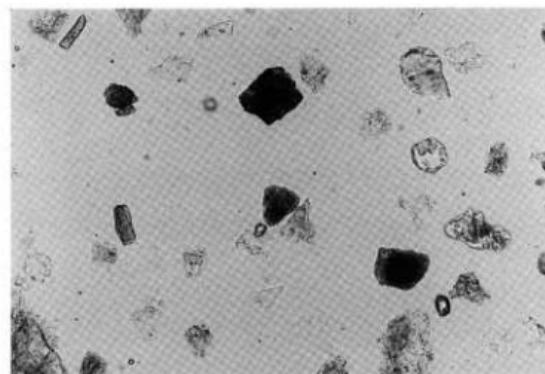
そ の 他

VG : 火山ガラス	CVG : 色付火山ガラス
Po : プラント・オパール	

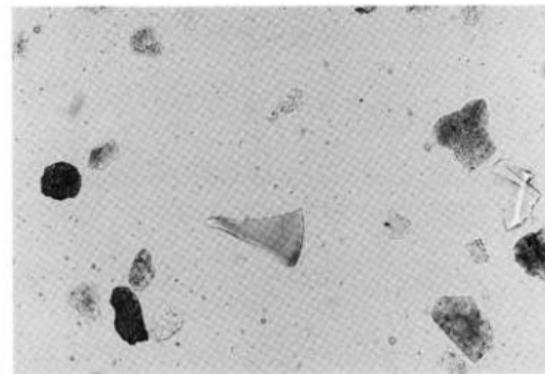
*但し、写真倍率は焼付ごとに毎回多少の違いが生じるが、
およそ70倍程度である。



No. 1
9層a 上
0~8 cm



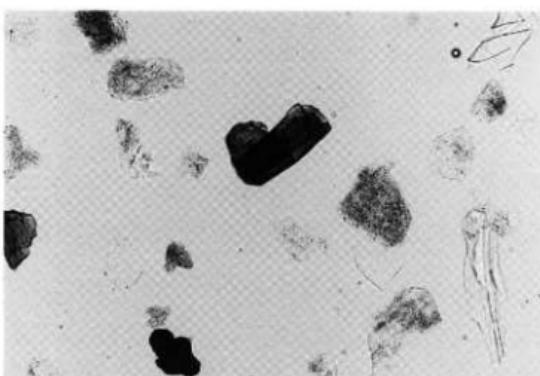
No. 4
9層c 上
20~26 cm



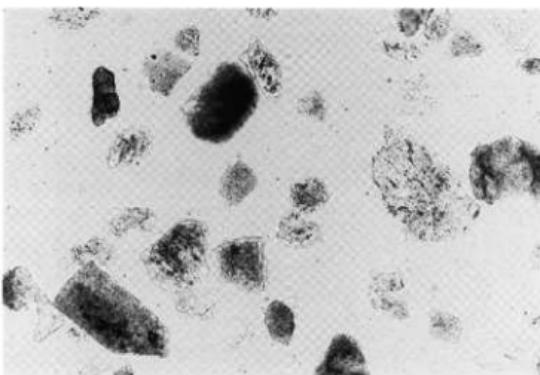
No. 7
9層c
38~46 cm



No.11
12層
75~82 cm

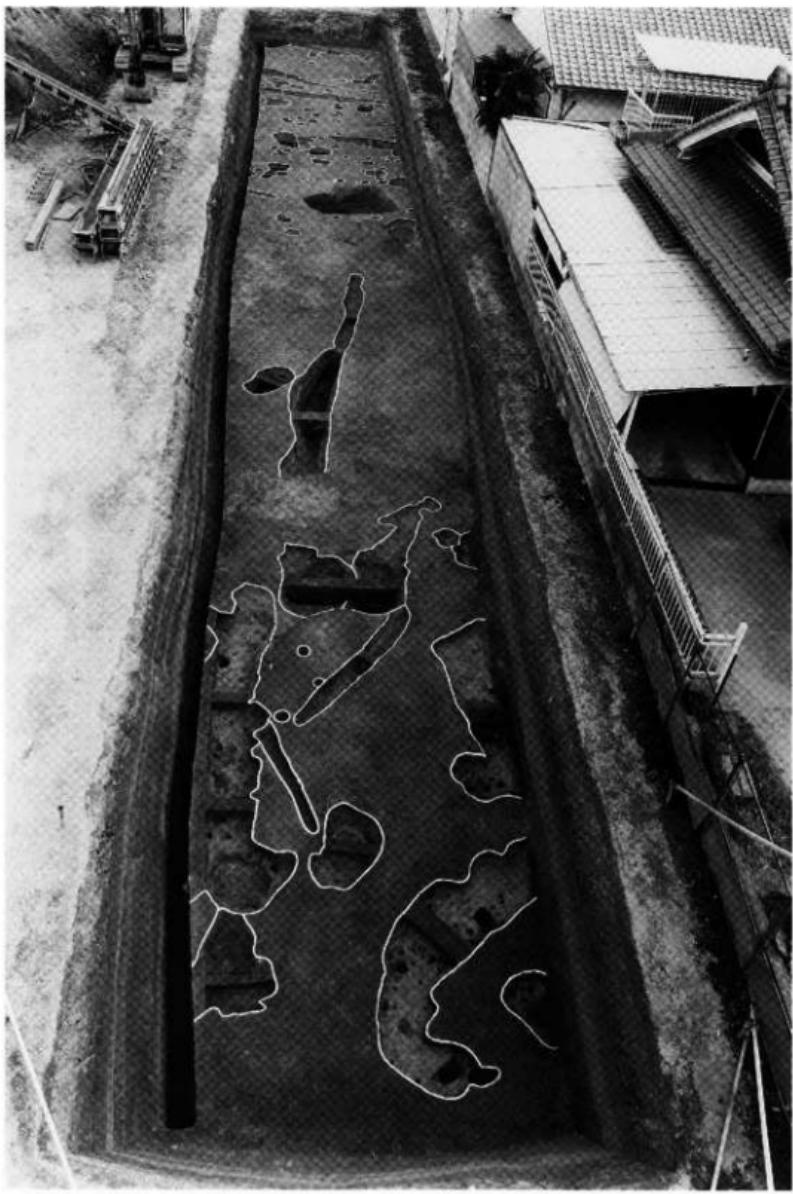


No.13
13層 b 上
82~88 cm



No.18
14層 下
135~148 cm

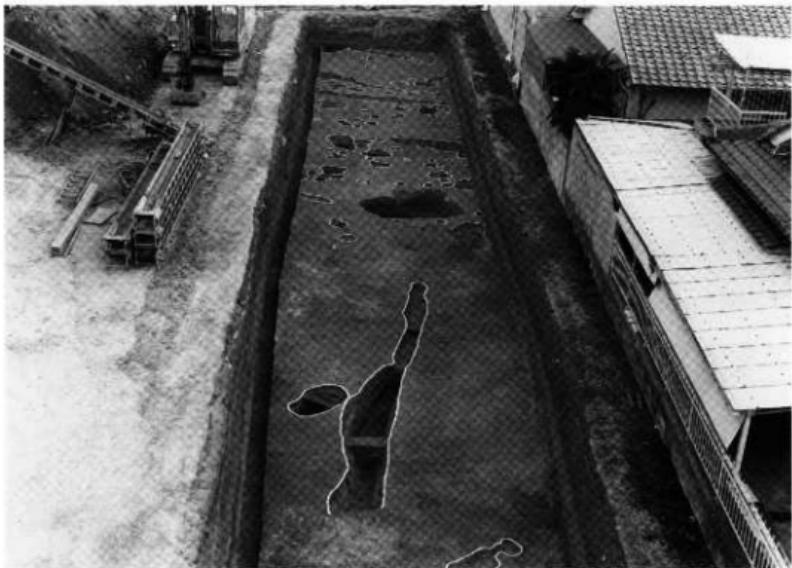
図 版



西トレンチ全景（北から）



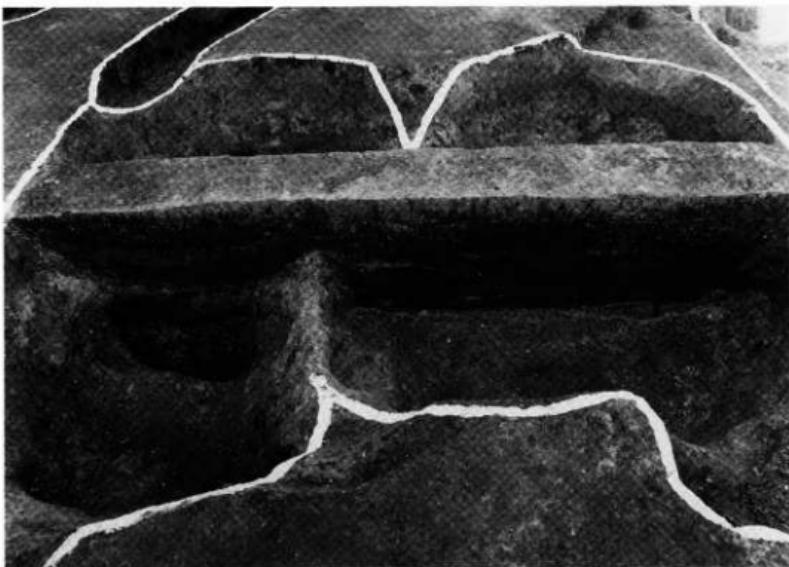
東トレンチ全景（北から）



西トレンチ南部遺構検出状況（北から）



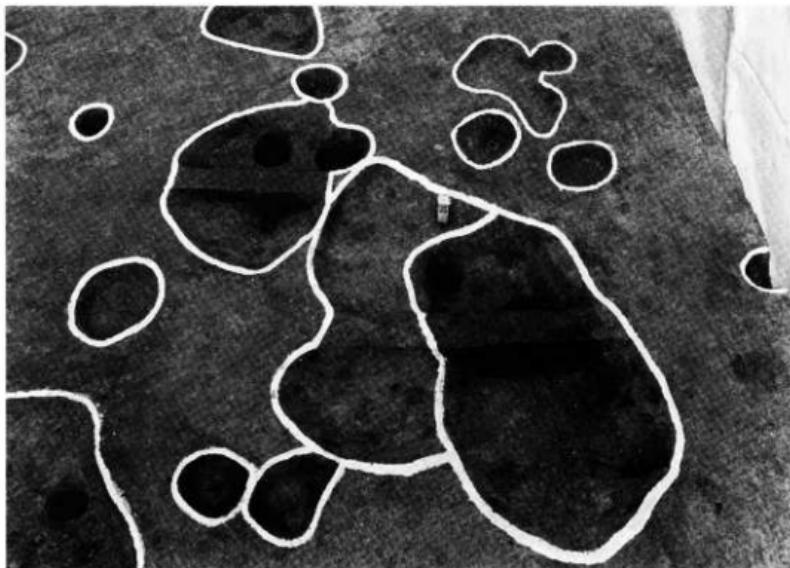
東トレンチ南部遺構検出状況（北から）



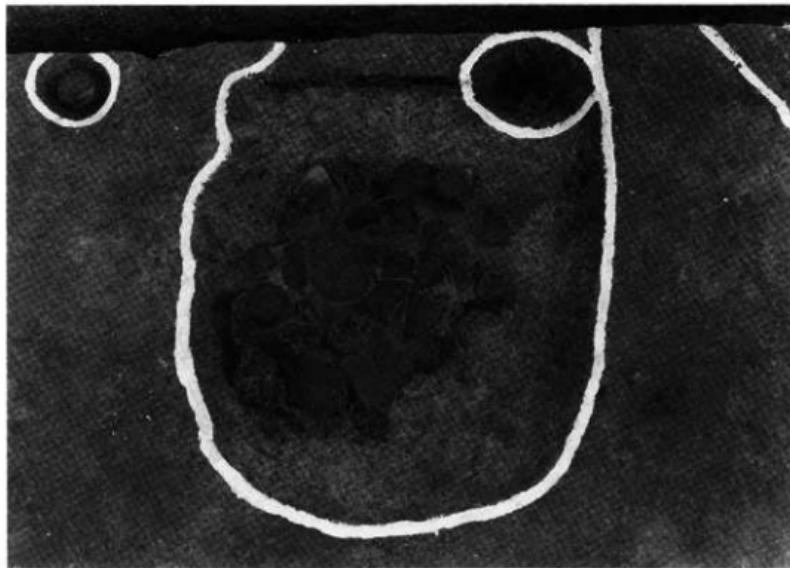
西トレンチSK-5(右)・SK-6(左)検出状況(南から)



西トレンチSK-8検出状況(南から)



西トレンチSK-14~16検出状況（南から）



西トレンチSK-19検出状況（西から）



西トレンチ下層確認グリッド
(手前から1～4グリッド) (北から)



西トレンチ下層確認グリッド
(手前から5～8グリッド) (北から)



東トレンチ下層確認グリッド (左-9グリッド・右-10グリッド) (西から)

